

# 志古津

過去からのメッセージ

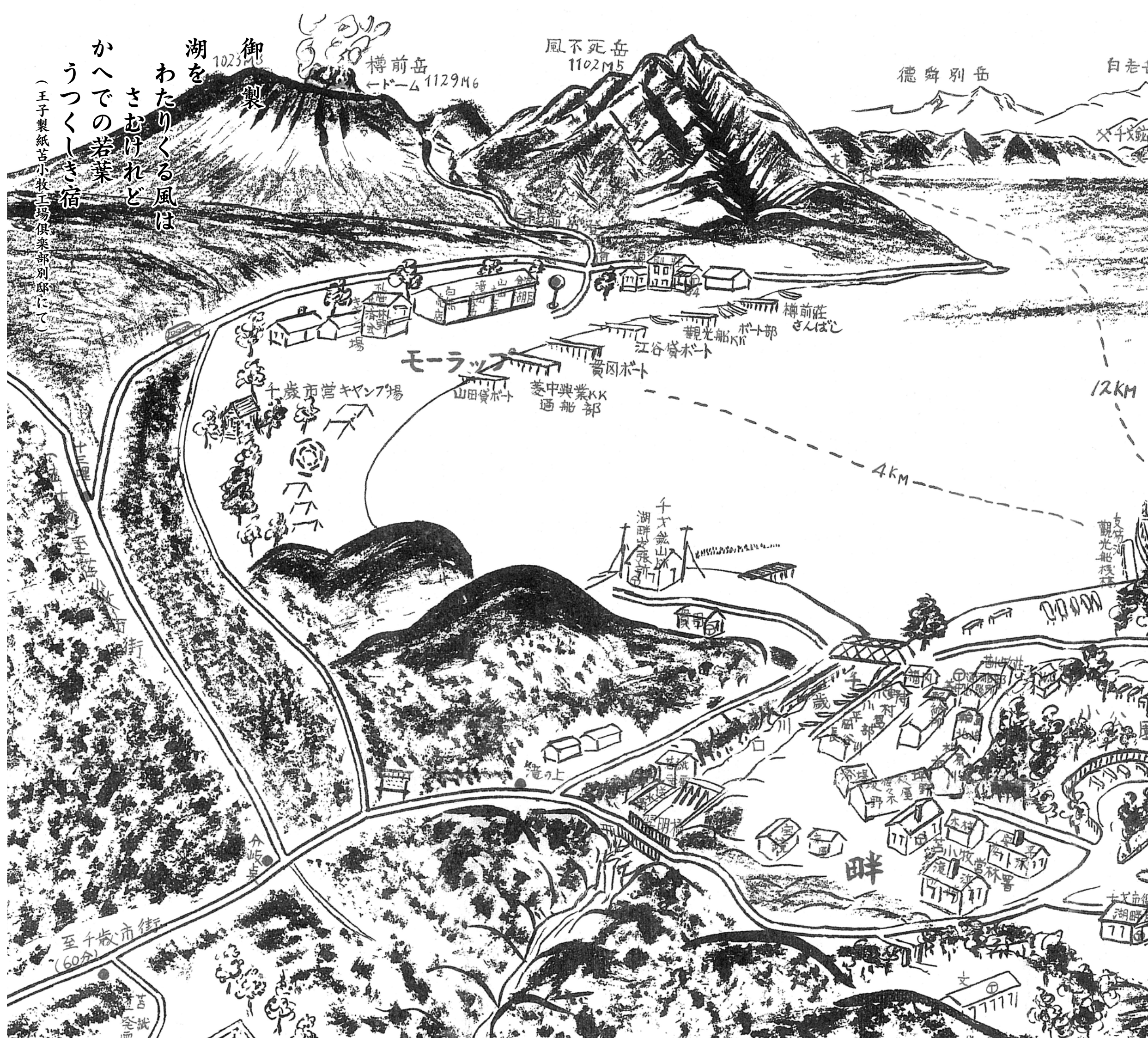
Message From the past

HOKKAIDO  
CHITOSE-CITY

## <掲載史稿>

食が文化を育て、地域を育む  
支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭  
なぜ今、『支笏湖歴史年表』か  
支笏湖歴史年表2015（『志古津』版）

中村由美子  
守屋 憲治  
先田 次雄



|                     |    |       |    |    |
|---------------------|----|-------|----|----|
| 食が文化を育て、地域を育む       | …… | 中村由美子 | …… | 1  |
| 支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭   | …… | 守屋 憲治 | …… | 9  |
| なぜ今、『支笏湖歴史年表』か      | …… | 先田 次雄 | …… | 27 |
| 支笏湖歴史年表2015（『志古津』版） | …… |       | …… | 29 |

あとがき

表紙の写真  
(大) 『国立公園支笏湖 洞爺 千歳市支笏湖案内』(昭和33年市制施行記念 千歳出版社発行)  
全体的にデフォルメされ位置関係は正確とはいえないが、支笏湖周辺の立地状況がよく判る  
地図左端のバスが走っている道は営林局林道、モラップ山沿いの道が苫小牧市道となる  
(小) 国土緑化大会植樹行事(植樹祭) 奉迎塔  
山裾右端のテントが御野立所 植栽地に残された切株から台風15号被災以前は巨木の森だったことが判る

※ 本文中「ママ」は、原文のまま引用したことを表している。



樹魂碑  
植樹祭モラップ開催の端緒となった昭和29年台風15号で倒された木々の霊を偲ぶため、植樹祭から4年目となる昭和40年5月24日に苫小牧営林署は口無沼のほとりに碑を建てた 口無沼は樽前山東側山麓の樽前国道と道道樽前錦岡線の間にある 昭和48年、丸山樹海の秘沼である口無沼の周辺は美しい自然景観から風景林に指定された  
樹魂碑から程近い丸山遠見からは樽前山麓とともに石狩平野南部、勇払原野を一望できる

＜背面碑文＞  
口無沼事業所跡  
十五号台風で倒れし木々よ／タルマイ山麓に再び美林が育成されん  
風倒木整理の中心基地なりしこの地に／一九六五年五月二十四日植樹行事の日／その霊を偲び建立

あとがき

寒い時期になると温泉が恋しくなり、若いころからよく日帰りで温泉に出かけた。出かける先は、支笏湖、美笛峠を越えて北湯沢、蟠溪、裏洞爺、洞爺湖、登別、カルルスの温泉が多い。ルートとしてはいつも支笏国道276号を走った。昭和五十九年に美笛峠越えルートは現在の快適なドライブコースに生まれ変わり、車が壊れるのではないかと思うほどの悪路から解放された。

平成元年には276号最後の改良工事となったモラップ付近の切替道路が開通し、支笏湖と風不死岳がパノラマ状に眺められる観光道路となった。モラップの切り替えられた旧道一帯が、今回史稿としてまとめた昭和三十六年の植樹祭の会場だった。

当時、苫小牧の若草小五年だったが植樹祭の記憶はなく、休みといえば道内初の特急「おおぞら」を苫小牧駅構内の跨線橋から飽かずに見ていた。

しかし、昭和六十二年の育樹祭の記憶は鮮明である。昭和五十年に遊学を終え千歳市に勤務、育樹祭開催当時は担当である農林課の係員として森林や林業の近くにて「森」の知識も付いた。

植樹祭から続く育樹祭をテーマとして選んだ理由の一つに懐かしさがあったのかもしれない。丸山遠見や口無沼は今でもよく出かけるが、中学生だった頃に父親、弟と一緒に行った遠い思い出がある。

昨秋、「支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭」をまとめるため数回にわたりモラップと口無沼を訪れた。自転車・歩行者専用道路となっている旧道に入ったのは四半世紀ぶりとなった。道路幅が二車線で六畳ほどと、現在の道路と比べると異様に狭く感じられた。また、アカエゾマツが育樹祭当時の倍の高さほどに成長していたのには驚かされた。

お手植え・お手入れのマツ、植樹祭記念碑を久し振りに見ることができた。また部分林内には間伐したのか立ち枯れしたのかはわからないが切株だけが残るもの、力なく枝が枯れているものも散見され、これが現実かとさみしい気持ちにさせられた。

さて、平成二十二年春から総務課市史資料調査員として『志古津』を担任して五年が過ぎた。担当者としてどのように市史資料を集めればよいのか悩んだが、市史編さん担当が発行してきた『志古津』を『新千歳市史 下巻』に対応、史稿を戦後史に特化して継続発行することで資料を収集することとした。この五年間、周囲の理解と協力で12号から21号までの『志古津』を発行することができ、一応の職責が果たせたものと感謝し安堵するばかりである。

これからは、市制施行六〇年にあたる平成三十年度をめざし『新千歳市史 下巻』の編さん準備に執りかかる。さらに多くの方々の理解と協力を得なければならぬと考える今日この頃である。(M)

志古津 第21号

『新千歳市史』機関誌  
発行 平成二十七年三月  
千歳市

〒066-8686

編集 北海道千歳市東雲町二丁目三四番地  
千歳市総務部総務課

TEL〇一二三(二四)〇一三七  
FAX〇一二三(二三)八八五二

印刷 千歳印刷株式会社

北海道千歳市錦町三丁目三番地  
TEL〇一二三(二三)二二二九

# 食が文化を育て、地域を育む

中村 由美子

千歳市グリーンツーリズム連絡協議会会員

## 私の食へ物史

**戦後開拓、食生活** 昭和二十七（一九五二）年に戦後開拓として駒里に二二歳の父が入植した。戦後と行っても既に七年が経過、かなり遅い入植で土壌の条件はとも悪いところだった。北海道の開拓と言えば森を切り開いて…というイメージがあるが、戦後しばらくまで農耕が行われなかったその地は柏の木が人の肩より伸びないようなところだった。その駒里へ、戦後二年目くらいに長沼へ入植した香川県の満州引き揚げ開拓団から母が嫁いできた。長沼ではすでに稲作をやっていたので、我が家は比較的に米の入手は容易だったようだ。少しずつ林を切り開き薪にして売りながら畑を広げ、まずは鶏と綿羊、そして乳牛を飼い始めた。

「でん粉の二番粉の鼠色した団子、南瓜の塩茹で。路や大根・人參何でも入った雑炊。それでも毎日三度箸を執る」（平井榮代）

「三月、主人が出面に行き、もらってきたお金を持って農家に買い出しに出かけたが・・・何軒か歩いて譲ってもらったのが親指の先ほどの薯」

「雪の山が日ごとに小さくなって来たので・・・防風林のなかは意外と暖かく、雪の間から路の藁が頭を出していた。うれしくて、又有り難かった。味噌もないから魚の油で炒めて塩を振って食べたが美味しくて苦いのも灰<sup>あか</sup>ばいのも判らなかつた」（勝野智恵子）

「暮れもぎりぎりになって開墾費が入った。せめてもと餅米を2升買い・・・白も杵も無いので先程顔を洗った洗面器をもう一度よく洗って米を入れ杵は藁

を打つのを使った。ひび割れた杵の中からいろいろな物が出てこみだらけの餅だった。美味しかった。・・・尾頭付きは小さなホッケ、あとは野菜の煮付け・・・」（勝野智恵子）

『拓土に花は実りて』抜粋（北海道開拓者連盟 昭和四十六年発行）

**自給自足中心、幼児期の食生活** 鶏を飼い卵を産み始めると五個、一〇個とまとめては市街地へ売りに行き必要な物と換えてきたようである。卵が一個あれば姉妹三人で卵かけごはんを食べることができた。香川県の讃岐平野出身の両親は山菜というものを知らなかった。私が物心つくまで食べた野生のものはセリ・蓴・ボリボリだけだった。その他の山菜は生活に余裕ができ新聞や本で知って食べ始めたらしい。たまに、罨で捕ったウサギ、スズメを焼いて食べたこともあった。二、三歳の妹が父に「スズメ、また捕まえて！」と言っていた。飼い猫がウサギを捕まえてくることがあつて取り上げて家族で食べた。動物性タンパク質はいつもご馳走だった。開拓の子ども仲間には蛇やドバトを食べた者もいたと聞いた。入植者の出身地によつて持ち込んだ食生活の違いが感じられる。

牛がお産をすると牛乳が飲める。初乳では牛乳豆腐と呼ばれるカッテージチーズを作った。ぜいたくな話のようだが牛乳豆腐は貴重なタンパク源でお産の度に必ず作っていた。飼っている家畜が何かの事故で死んだときなど近所中で肉を分け合つて食べるということもあった。綿羊は野犬に襲われてひどい怪我をした時に、かわいそうで安楽死させた。子どもながら悲しいような美味いような微妙さを感じながら食べたが、たいいていの場合、血抜きが足りなかったり鮮度が落ちたりしていた。牛肉の場合は旨味成分のアミノ酸が増加するエージングができていないので、振り返ると旨味が足りなかつたと思われる。

あるとき、母が「長沼へ田んぼを手伝いに行つてくる」と就学前の子ど



写真1 原付バイクで出かける父を見送る母と私たち(昭和35年撮影)

も三人を家においていなくなった。三日間、父の作る食事は牛乳でこねたホットケーキ状のパンとうどん、すいとんと小麦粉ばかりだった。父は香川県の出身なので上手にうどんを打ってはいいた。それでも「やっぱり父さんはごはんが炊けないのかなあ」と思った。実は家には米もお金もなく、母が実家を手伝ってお米をもらってきたのだった。もらってきたお米は昭和三十五年頃、それも泥炭地でとれた猫またぎ米だったが、子ども心にもその時のお米の美味しさが記憶に残っている。

おやつは芋の塩煮はもちろんだが、これが主食の時もあった。畑の回りで遊びながらハスカップ、まだ青いグスベリ、スモモも採った。桑の実には美味しいけど服に色がついてよく叱られた。川べりの野いちご、花托の穴に虫がいまいかな確認しながら食べた。もちろん洗ったりはしない。行商から買い求めたかりんとうや飴はちよつとぜいたく。近所で祝い事がある

と紙箱に入った鯛の形の大きな落雁、姉妹で何日も少しずつ食べた。不祝儀では大箱にキャラメルが五箱並んだのがいただけだ。夫が育った江別では中華まんじゅうばかりだったそうだが、私はキャラメルで良かったと思う。口の中でとろける古谷の「ウインターキャラメル」が好きたった。

**餅** 正月を前に貧困開拓者も餅をつく。この頃家族六人で三〇<sup>キ</sup>の餅米を母の実家か

ら求めて搗いていた。黒豆やヨモギの入った餅、食紅を入れたピンク色の餅、餡餅は甘いのと塩味の二種類があった。両親が香川県出身なのでお雑煮にも餡餅を入れた。これが塩餡なのかと思いきや、「甘い餡餅もいい」と父が言う。煮干しダシに味噌味は香川からの伝統。子どもたちは既に関西の味覚から外れてきていたのか切り餅の雑煮。雑煮は私たちが社会に出るにつれ鶏のダシを取るようになったり醤油やみりん味をつけるようになった。

あの頃は冬中、毎日お昼もおやつも餅だった。薪ストーブの上で焼くだけで食べられるのは、エネルギー対策から手間をかけないためにもよかったのだと思う。今は大人ばかり五人、一〇<sup>キ</sup>の餅も手に余すようになった。

**買い物** 酪農は大儲けはないけれど毎月毎月お金が入るので(実際には借金経営であったとしても)食生活は安定し、時々市街地へ買い物にも行った。父が原付バイクで塩鮭などを買ってきた。瀧川商店、千歳マーケットあたりが食料品調達のメインだった。

また毎週一度は、自転車に一斗缶やかごを取り付けて行商のお兄ちゃんが行ってきた。ご馳走の鯨肉は、五〇〇<sup>ギ</sup>とか一<sup>キ</sup>のブロックで一斗缶の中で氷に埋まっていた。これをまず短冊状に切って冷たいままルイベで食べる。この美味しさは今でもよく覚えている。残りを竜田揚げ、醤油漬けなどにして何度にも分けて食べた。今となつてはぜいたくな話だ。

所属していた開拓農協に「くみあいストア」がオープンした昭和三十九(一九六四)年頃は、自分たちの店でもあるので、よく利用した。千歳で初のセルフ方式の店で、かごを持ってレジに並ぶのは新鮮で子どもばかりでなく大人達もうれしかったようだ。一時期この店のクラフト紙袋は千歳の町ではトレンドだった。行商人はその後、軽ワゴン車となり豆腐、揚

げ、魚肉ソーセージ、調味料、食材もいろいろ積んできた。もちろん、甘露飴やかきんとう、豆パン、あんパンなどのおやつも豊富に積んできた。平成に入る頃になると農家の女性達も高齢者以外は車を運転をするようになり、日々の食料品をより安いスーパーマーケットへ気軽に走るようになったので、行商の姿は消えていった。

**食生活の向上へ** 昭和二十年代半ばから四十年代半ば（一九五〇～七〇年代）になると、保健婦による健康相談や農業改良普及員による農村生活改善指導の巡回が盛んで農家の女性の栄養不良や貧血が問題にもなり、三大栄養素を摂取するメニューの提案や、衛生、食品加工などが次々に新たな知識として入ってきた。

開拓当初は薪ストーブで暖を取り調理も行っていたのが、昭和三十三年（一九五八）年頃だろうか、かまど運動が生活改善で進められ「台所」ができた。真夏に薪ストーブで汗をかきながら調理しなくともよくなった。青いタイルに覆われた二口のかまどは熱の調節もある程度出来、ごはんを炊きながらおかずを作ることができた。余熱を使いながら鑄物のパン焼き器も活躍していた。生のイースト菌は大事に育て毎日パンを焼いていた。時々かまどの温度が高すぎて焦げることもあった。

昭和三十九（一九六四）年、ネフローゼを病んでいた弟が亡くなった。その頃の葬儀は自宅に近所の人が集まり、料理も出した。この時、少しでも便を図ろうと一口のプロパンガスコンロが我が家の台所に現れた。程なくガス炊飯器も入り、天火（オープン）を購入しお菓子を作ることがあった。酪農家庭を対象としたバターづくりも習い、その豊富なバターを使って「ロシアケーキ」というかなり濃厚な洋菓子作りに母がはまっていた。バナエッセンスのぜいたくな香りとしっとりとした甘さは魅力的だったが、あるとき体重が増えたのと砂糖の消費量がすごいことに気づいた母は

作るのをやめた。

やはり農業改良普及員の指導のもと共同でドラム缶を改造し燻製窯を作り、それぞれが鶏をつぶして持ち寄り燻製を作ったりした。畑仕事も一段落した晩秋に作るとしばらくはよい保存食として利用できた。

**お弁当から給食へ** 小学校に入学したのは昭和三十六（一九六一）年だが、当時は家庭からお弁当を持って行った。女の子は赤いアルミの花模様がついたお弁当箱が定番であった。三年生か四年生の時には給食センター方式で学校給食が始まった。僻地の小学校にも食缶でおかずや脱脂粉乳が運ばれてきたが、普段から牛乳を飲んでいる私たちには脱脂粉乳は「残してはいけない」辛いものだった。二年ほどで瓶の牛乳に代わった時はうれしかった。しかも当時、開拓地から集乳していた森永乳業のものだったので誇らしい気持ちだった。

**肉** 親戚や近所が集まり農業用トラックの荷台に幌を張り大勢で乗り込み、支笏湖方面へタケノコ狩りに行ったり、ウトナイ湖へ出かけた。出かける時はいつもガスコンロとジンギスカン鍋、マトンと畑の野菜を持って行き、それぞれの家庭で作った「たれ」を自慢し合いながら食べるのが常だった。当時はまだまだ肉を豊富に食べられる時代ではなく最高のレジャーだった。

どこの家庭でも飼っている鶏をご馳走にするときがあった。逆さまにするして首を切り血抜きをし、羽をむしり、あぶってからさばく。末の妹が父が羽をむしっている横でうれしそうに見ていたことが印象に残っている。近くにハンターがいて、鹿の肉を時々いただいた。また、一度だけ熊肉がやってきたことがあり、近所の人と熊鍋をしたが、黒くて繊維のはつきりした肉はとても食欲を誘うものではなく、一口食べてみてやめた記憶がある。



写真2 収穫した千歳スイカを持つての記念写真(昭和40年頃撮影)

## 畑の収穫

畑に最初に植えたのは馬鈴薯、南瓜、大根、人参、白菜、キャベツ、ほうれん草、<sup>えんどう</sup>豌豆であった。これらはほとんどが自家用で、馬鈴薯の小さいものは、ストーブにかけた大鍋で煮て豚の餌にもなっていた。農耕馬に食べさせるために作っていたのが燕麦だったが、学校帰りの子どもたちは所構わず道路脇の燕麦に手を伸ばしては、穂の花の中心の蜜をすった。蜜はほんのりと甘く幸せを感じた。

甜菜ビートは昭和三十五(一九六〇)年頃、家族総出でピンセットを持ちペーパーポットに出た芽の間引きをした。出荷のこぼれビートを煮ると砂糖が採れるのだが、そんなこともせず今になってもったいなかったと思う。情けないほど少ない収量だが、小豆、牛の餌のデントコーンや飼料用の蕪も作っていた。蕪は時々食卓にも上った。

何より楽しいのはスイカの栽培だった。当時はポリポットがなく、長さ

三〇<sup>センチ</sup>、幅一〇<sup>センチ</sup>程の経木を輪にしてホッチキスで留め、円筒状にして並べ土を入れて苗を立てた。ホッチキスの仕事が出来なかった。夏になると畑にスイカがごろごろとできる。トラックが集荷に来て家族総出のリレーで手渡しで積み込んだ。大人はかけ

声をかけながらバスケットボールのようにパスしている。時々手を滑らせて落とすと食べることになる。大きなスイカを子どもも半分ずつスプーンで食べた。スイカの栽培をする頃には茄子やきゅうり、アジウリ、カリフラワーなども作り始めた。ブロッコリーやピーマンは昭和五十年代半ばに入ってからである。

トウキビもよく作った。当時はクロスバンダム、モチキビで歯にくつつくのだが焼くと香ばしく美味しかった。八列トウキビも同じ種類である。まだスイートコーンを知らなかったので、充分に美味しいと思っていた。昭和四十五年ごろになってスイートコーンのハニーバンダムが登場、甘くて食べやすく瞬く間に主流となっていった。

母方の親戚がアメリカに渡っていてミニトマトの種を手紙に入れて送ってきた(今考えると検疫も受けずにとんでもない話だが)ことから、我が家では昭和四十(一九六五)年頃からミニトマトを食べていた。全くの放任栽培で種が落ちて毎年生えるという雑草のようなミニトマトだったが、昭和四十六年ごろ、高校への弁当に一粒入れるのは回りにはぜいたくに見えたようだった。一般にはようやくお目見えしたばかりだったのだ。

昭和四十五年頃からは市内にスーパーマーケットも増え、マイカーの普及から、自給野菜や牛乳以外はさほど都市生活者と変わらない食生活になったのではないだろうか。

## 千歳の農業

現在、千歳市の農業生産額は石狩振興局管内で一番を誇っている。しかし、農家戸数は全国的傾向ではあるが減少の一途である。全体では平成七(一九九五)年四一五戸が、一五年後の二二二(二〇一〇)年には二二一戸と半減した。私の周りを考えると駒里の開拓地区で昭和四十五

(一九七〇)年三七戸であつた農家が二〇戸ほどになり、そのうち農業で生計を立てているのは八戸である。一戸ごとの経営規模は大きくなつたが、参入してきた法人経営の従業員や外へ働きに行っている人の割合が多くなっている。

千歳の農業の全体的な傾向では大規模な畑作や畜産が盛んで、畑作では小麦、テンサイ、豆類、馬鈴薯、蕎麦、加工用コーンが、畜産では酪農、養鶏、養豚などが盛んである。

千歳は大昔から繰り返された千歳川やケヌフチ川の氾濫による肥沃な土壌に恵まれ、おいしい野菜がとれる。ブロッコリー、大根、葉菜類、ハスカップ農家も数軒ある。最近では薬用作物の栽培も増えてきている。

千歳市の南西側は国立公園支笏湖を中心とする山岳山林地帯で、農地はJR千歳線の北東側だけに広がっている。かつては上長都や北信濃あたりにも農地が広がっていたが今は全くないようだ。

千歳の農作物の多くはJAを通じ道外や札幌方面に出荷され、一方千歳市内の大きなスーパーなどではそれぞれの仕入れルートを持っているために地元産の野菜が手に入りやすい。生乳の出荷先は明治、新札幌乳業、フジッコなどに配乳するホクレンのほか、サツラク乳業がある。

卵はホクリヨウ、トーチクが大手で、はるか農園、コッココーポレーションなどもある。豚肉はホクレンの「うまい豚」(駒里おおやファーム)のほか、山中畜産SPF(駒里)などが知られる。

最も生産量の多いパレットの丘に象徴される東千歳の畑作では、多くの後継者も育っている。



写真3 8月頃に駒里で収穫される野菜

主要農産物生産量(平成二十五年数値(馬鈴薯のみ二十四年数値))

|      |                                                                                                                                                                                        |       |
|------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------|
| 水 稲  | 一五五〇ト                                                                                                                                                                                  | 七四一ト  |
| 小 麦  | 一一一〇ト                                                                                                                                                                                  | 四三〇〇ト |
| 大 豆  | 三七二ト                                                                                                                                                                                   | 七八四ト  |
| 馬鈴薯  | 一四三ト                                                                                                                                                                                   | 五三一〇ト |
| てん菜  | 五四六ト                                                                                                                                                                                   | 三二〇〇ト |
| 千産千消 | 「町中に賑わいを作るにはどうしたらいいか」、「やはり食べ物でしょ。千歳のいいものを知らせましょう」と、平成九(一九九七)年に市内の商業、農業、教育関係者など、様々な立場のおかみさんが集まってニューサンロードやグリーンベルトで野菜、農産物の直売を始めた。発端は「えっ?千歳に農家ってあるの?」と、おいしい千歳産があることも知らない若い人の声を聞いたという一言だった。 |       |

畑作(加工の原料)

翌年には市街地の二カ所、ピアワークス(道央農協の女性部)とビックリッキー(当時は開拓農協の女性達)の駐車場の角で毎週土曜日に「市」を立てた。道央農協と開拓農協のメンバーと消費者協会の呼びかけによって、市内の直売所が集まり「千歳とりたて野菜まつり」を年一回開催するようになり、一〇店

舗ほどの直売所がテントを並べ、市民に千歳産の野菜がこんなにあることや千歳の農業を知ってもらった。

第二回目の千歳とりたて野菜まつりで「千産千消」という言葉が生まれ、バラバラだった直売所同士が結びつき情報交換と共同の事業へとつながった。これが千歳市グリーンツーリズム連絡協議会の設立の母体を成す活動となった。

年に一度の千歳とりたて野菜まつりは、平成二十五（二〇一三）年にグリーンベルトで「軽トラ市」が始まるまで続いた。

**農と食の交流会** つながった直売所や体験農場が力を合わせ様々な農業関係機関に呼びかけ、実行委員会形式で千産千消の料理パーティをホテル日航千歳で行うようになった。今年二月でちょうど一〇回目になった。いつも冬の開催なので「冬にどれだけ地産地消の料理ができるのか？」との不安要素もあったのだが、毎年参加者数を制限するほどの盛況ぶりだ。実際にやってみて私たち自身が根



写真4 消費者と生産者が交流する「食と農の交流会」  
(ANAクラウンプラザホテル千歳 平成26年撮影)

菜類などの越冬野菜と畜産物でこんなに豊かな料理ができることに驚き、農業者としての自信につながっている。

#### グリーンツーリズム連絡協議会

平成十七年から始まった千歳市グリーンツーリズム連絡協議会は「千歳のいいところは空港や支笏湖ばかりじゃない」と、郊外にたくさんある直売所、体

験農場、農家レストランのほか農家民宿などの連携で、会員のスキルアップと情報の共有、イベントやマーケティングの協同運用のために

- ・マップの作成と配布、スタンプリリーの実施
- ・農業体験、食育講座、バスツアー、講師派遣、料理教室の実施
- ・食と農の交流会、農家のかあさん手料理パーティの開催
- ・修学旅行や学校の研修など宿泊や半日体験など受け入れ
- ・軽トラ市やビアフェスタなど、市内イベントへの参加などの活動を行っている。直売活動やGT活動を通じて、私たちはただ生産して出荷し、消費者の顔を見ずして販売していた頃に比べ多くを学んできた。

また、千歳で生産される農産物を使つての新しいレシピ作りも盛んに行われている。千歳だからこそそのハスカップなど小果樹の料理への利用や、うずら豆（中長）を使つたスイーツの開発、近年栽培が盛んになりつつあるヤーコンの料理など、毎年新しい食べ方を提案している。食と農の交流会ではそういった料理を囲んで消費者と生産者が交流し、新しい食文化を育てている。

新鮮な地元のは栄養価が高い、青果であれば栄養価が数分の一になるほど輸送による消耗が激しい。このことが千産千消の大きな自信と行動の意識づけとなった。

そして食は命のリレーで、どのような生き物も他の生き物を食べることで生きている。「いただきます」という言葉の意味や、「命を食べていることの自覚」をいろんなところで話すことが私のライフワークにもなっている。食は命のリレーだということを小学校低学年から伝えていくことが重要だと思っている。

## 食は文化

文明は、大きな川の流域で洪水によって肥沃となった農耕の適地、あるいは水を求めて野生動物が集まる狩猟の適地など、食料を安定的に確保できる場所から始まっている。適地の産物で住居や衣類も工夫され、人が集まればコミュニティが形成され知識が集積する。人の食は「エサ」ではない。餌は必要な栄養が摂れればいいわけだが、人にとって食は原材料を技術によって加工、調理、味付けし、いろいろな食べ物や調味料の組み合わせとバリエーションがどんどん広がる。季節があれば保存の知恵も生まれ、美味しいもの、安全なものをおなかいっぱいいつも食べたいという人類の欲望が文化となり、次世代へとつないでいく。食を楽しみ、土地に根ざした文化として磨かれ続ける。保存の方法も乾燥食品、発酵食品、漬け物など地域によって大きな違いがある。

日本には米やそば、海産物の文化が生まれた。北海道ではニシンや鮭、昆布などを原料とする食の文化がはぐくまれ、今なお保存、加工という食の方法が研究されている。文化は発祥の地にとどまらず変化と発展をし続ける。

自然界の動植物であっても、先日、市内の小学校で発生したジャガイモのソラニン中毒のように人にとって有害なものも少なくない。馬鈴薯を明るいところへ置かない、陽に当てないという戒めは、本来、人から人へ経験則として語り継がれなければならないのだが、最近はどういった人類の学びが伝えられないか、どこかで遮断されている。

近代文明のもと、情報が氾濫と混乱を繰り返す時代にあつて人は移動を繰り返し、食の分業化が進み、どこで生産され、どういう人の手を渡つて、どこでどのような加工をなされ、私たちの口に入るのか、誰もが想像すらできない世の中になりつつある。新たに暮らしを作っていくという

世代は長年培われている食の文化を提供されずに育っている。「だれが作っているのか分からないけれど安心は担保されている、という思い込み」があるが、どのようなものでも一〇〇％の安全がないのが食べ物。たとえば、きれいな商品でも時間が経てば劣化する。そういったときに安全性を判断する能力が蓄積されて来ているはずだが、手軽に完成品を手に入れることが人として能力を低下させているのは否めない。

### 「栽培・飼育・加工と調理」体験

昔は、親から子へ、地域の先達から次世代へと伝えられた食べ物と命に関わる知識や技術も、図書や資料として閉まったり飾っておいたのでは人類は衰退していくに違いない。もちろん、ネット検索やツイッターでもレシピやHOW TOも調べられるが情報を受ける側にその項目自体が情報としてなければ結局お目にかからずに終わってしまう。「徴兵制より徴農制」という方がいたが、少しでも若いうちに、食べ物が生産される現場で土や家畜に触れ「食べ物が生きていた」ことを体験することが重要だ。先日、北海道の食肉処理の大手である北海道畜産公社の方と会合で同席した時に「消費者にも子どもたちにも、食肉処理という作業を経て家畜が肉となり、食卓へ運ばれることを知ってもらいたい。衛生上の観点から工場内を直に案内はできないけれど、ガラス張りの見学コースを十勝には造ったし、DVDによって映像も用意した」と話していた。千歳市内に食肉処理工場はないけれど、農作業や食品の加工、調理が体験できる機会はたくさんある。グリーンツーリズム連絡協議会では企画のほか、案内や情報提供も行っている。

以前、「食べ物と命」の授業でいくつかの小学校を回った。ある小学校二年生の教室で冒頭に、子豚や仔牛、ひよこの写真を見せたときに「ワーか



写真5 千歳市グリーンツーリズム連絡協議会出前  
講座の「親子食育講座」(泉沢小学校 平成  
24年撮影)

時に、このような授業をする  
ときに保護者からは「残酷だ」  
などとクレームを突きつけられ  
るが、猫がネズミをライオンが  
シマウマを食べるように自分も  
生きていることを理解できる人  
を育て、野菜が成長する楽しみ  
を感じる豊かな人を育てていく  
ことが重要で、多くの農業者も  
その役に立ちたいと心構えを  
持っている。

もちろん、野菜や穀類もそれらの繁殖を利用して命を食べるものなのだ  
が、子どもたちがすべての生物がほかの命を栄養として摂取していること  
を知った瞬間だった。

「病気の動物は食べちゃいけないの。人の体にも悪いかもしれないから  
ね。年取って死ぬまで待った方がいいと思うかな」と言うと、しばらく子  
どもたちは考えながら周りと相談する。男の子が立ち上がって「きつと、  
美味しくなくなっちゃうんだよ」と言った。その一言で、みんなは納得し  
たようだった。

「豚は八カ月くらいでお肉になります。牛も一八〇二〇カ月、鶏は二カ  
月です」というと教室はシーンと静まりかえった。ある女の子が「自然に  
死ぬまで待つてあげられないの」と聞いてきた。  
「唐揚げが一番好き」「私はハンバーグ！」などと答えが返ってきた。  
「唐揚げが好き？焼き肉も好き？唐揚げは」と聞くと、無邪気に「大好き」  
わいい」と写真を取り合いするほどに喜んでいた。その後に「みんなハン  
バーグ好き？焼き肉も好き？唐揚げは」と聞くと、無邪気に「大好き」

## 終わりに

開拓農家の暮らしの中で食と命の関わりの延長線上に地域の発展があ  
り、私自身の社会参画の糸口があったと思う。今回、『志古津』に寄稿す  
る機会に恵まれた。その後、千歳市開拓農協(開協)の最終精算総会があ  
り開協六〇年の歴史を振り返るチャンスも重なった。開協の四〇年史『砂  
礫に耕す』や解散に当たって寄せられていた思い出の文章を読むことがで  
き、資料として使わせてもらうことができた。また、農業改良普及事業の  
歴史についても北海道改良普及協会にも史実を確認をさせてもらった。

寄稿のチャンスに感謝しつつ、今後、明治以降に入植された地域の経験  
や残されている資料の中から食の歴史についてさかのぼってみたいと考え  
ている。

# 支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭

守 屋 憲 治

千歳市史編集委員会専門部員

支笏湖畔モラップに活火山樽前と風不死を眼前に望むキャンプ場がある。キャンプ場は支笏湖東岸唯一の砂浜で、都会の喧騒を忘れ時を過ごすことができる。このキャンプ場を見下ろすのがモラップ山で、山裾の自転車・歩行者専用道路となっている旧・国道276号の坂を八〇〇メートル程行くと両側の緩斜地に樹高一八メートル前後の針葉樹の人工林が広がり、北側の森には二五〇メートルほどのエゾシカの食害防止ネットが張り巡らされている。

この針葉樹林は昭和三十六年五月に昭和天皇、香淳皇后（本文中・天皇皇后両陛下）をお迎えして開催された第一二回植樹行事並びに国土緑化大会（当時通称・植樹祭／S45改称・全国植樹祭）で植樹されたアカエゾマツである。

第一二回植樹祭とお手入れの第一一回全国育樹祭（S62）、苦小牧静川で開催された第五八回全国植樹祭（H19）、これら三つの行事を核に周辺の出来事をまとめてみたい。

## モラップ山

植樹祭の舞台となったモラップの概要は次のとおりである。

支笏湖畔のモラップは二つの小山からなっている（mo-ra-p 小さな・低い・もの（山））。支笏湖温泉に近い方がキムンモラップ（478メートルのモラップ）、苦小牧側をピスンモラップ（506・4メートルのモラップ）と呼び、四万二〇〇〇年前の支笏

火山の大噴火で支笏湖が出現する以前から存在した古い山だという。ピスンモラップの北斜面を利用した国設モーラップ山スキー場が昭和三十八年から平成六年まで中モラップにあった。また、二つのモラップ山の間をモラップウツルといいカルデラの際に北海道百年を記念した千歳市青年の家支笏湖青少年研修センター（S44～H17）と労働省所管の支笏湖勤労青少年フレンドシップセンター（S49～H15）が並んで建っていた。

モラップへの道について考察したい。モラップウツルの中モラップまでの道路が完成したのは昭和十年のことである。翌年には千歳自動車合資会社が創られバスが運行された。このバス会社が北海道鉄道に譲られ千歳川右岸の湖畔（現・休暇村付近）に到達したのは十二年のことである。

支笏国道と呼ばれる一般国道276号の前身は、昭和二十五年八月に開通した苦小牧市道支笏湖産業道路の苦小牧営林署丸山事業所廠舎から分岐する林道として二十八年八月に開通、苦小牧市営バスがモーラップ線を開業し湖畔から船でしか行けなかったキャンプを野営場に運んだ。モラップから先、美笛までの支笏湖南岸林道が札幌営林局の手によって開通するのは三十五年のことである（S40～道道、S45～国道）。

モラップは砂浜が広がるキャンプ地として戦前から知られ、昭和十三年には日独青年交換会が行われた。戦後の二十四年に道営モーラップキャンプ場として開設、三十三年に千歳市に移管されている（H6休暇村委託、H9環境庁移管）。この間、三十一年には後のモーラップキャンプまつりとなる「湖畔の夕べ」が苦小牧観光協会によって始められた（H元統合↓支笏湖湖水まつり）。

執筆者註 「モーラップ」とは千歳市の字名「モラップ」の通称であり本稿ではモラップを原則とするが、一部引用部分と固有名詞などにおいて併記する。

## 植樹祭前年の動向

支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭が、どのように決定したかについては不詳である。しかし、山形県上山市蔵王山麓大森山において昭和三十五年五月十日に開催された第一回植樹祭視察のため、市の神藤為五郎助役と議会産業経済常任委員会の委員長と委員が出張している。

この視察は千歳における行事を計画する上からも多くの参考に資する点が多かったといい、市ではどのように対策を立てるかなどにつき産業経済常任委員会とともに資料に基づいて検討を重ねていったという。

植樹祭は緑の羽根募金運動や学校林運動を推進し国土緑化運動の高揚を図る国土緑化推進委員会（現・国土緑化推進機構）と都道府県の主催であるが、国土緑化推進委員会を所管する農林省の外局である林野庁、そして天皇皇后両陛下のご臨席を仰ぐことから宮内庁とも密接な関係にあった。

蔵王山麓大森山で植樹祭が開催されたころ、すでに翌年は支笏湖畔モラップ山麓での開催と両陛下のご来道は五月二十五日とされていた。ご来道を前提に北海道林務部は宮内庁と日程を折衝するための試案を練った。試案は三泊四日から五泊六日までの三案があり、宮内庁の下検分を待つて三十五年中に計画の概要がまとまる手はずになっていた。

いずれの案も、一日目は千歳に到着後直ちに支笏湖畔の王子製紙苫小牧工場倶楽部別邸（別邸）に向かわれご宿泊、翌日は植樹祭ご臨席と別邸に後泊となっていた。

「支笏湖畔モラップ山ろく（支笏湖畔モラップ山麓）」とは千歳市と苫小牧市にまたがる場所を示したもので北海道林務部『第十二回植樹行事並びに国土緑化大会実施概要書（植樹行事実施概要書）』にある植樹行事の開催場所であった。当時、『広報ちとせ』では「支笏湖畔モラップ」とし、新聞紙上でも多くが同様だった（一部紙上「支笏湖畔」）。

十一月十八日付『北海道新聞』に植樹祭の計画概要が決まったと報道された。

十七日計画の概要がまとまった。それによると両陛下の日程は宮中行事との関連から明春五月二十三日羽田発特別機でご来道、四泊五日の日程で道内を視察される見通しが濃くなったため、両陛下のご出席する植樹行事は五月二十四日支笏湖畔モラップで行い、翌二十五日は農林省林業試験場道支場でトドマツのおてまきをしていただく計画である。

なお来道日程変更にとまなう視察箇所は当初の第二案を若干修正されるもようである。①植樹行事②おてまき、など実施概要はつぎのとおり。

①植樹行事（引用者要約）支笏湖畔モラップ山ろくで国土緑化大会、ひきつづいて植樹行事。苫小牧国有林苫小牧事業区三・四林班と千・二林班の九・二班、参集予定者一万二千人（中央招待千人、道内招待九千人、招待者以外の参集者千人、大会奉仕者千人）、一人三本の割でアカエゾマツ合計三万六千本を植える。函館、稚内、北見、網走、根室各駅発、千歳、苫小牧駅着の『緑の列車』4本特発、バス二百台、ハイヤー百五十台を準備する。宿舎は千歳、苫小牧は大会役員の宿舎にあて、招待者は登別（中央招待者千人）と札幌（道内招待者千五百人）に分宿する。

記事にあるご来道日程第二案とは次のようなものであった（八月十日付『北海道新聞』掲載）。

五月二十五日、千歳着、直ちに支笏湖畔王子苫小牧荘別邸に行かれ、お泊まり。二十六日、支笏湖での植樹祭ご臨席、同別邸お泊まり。二十七日、札幌市豊平の農林省林業試験場道支場では（播）種、道庁、北大クラーク記念館、北大植物園、道立札幌養老園（または道立中央乳児院）ご視察、定山溪拓銀栖霞荘<sup>せいかせう</sup>か知事公館にお泊まり。二十八日、道立美唄職業訓練所、栗山町の王子育種研究所ご視察のあと、登別グランドホテルに二泊。二十九日苫小牧港、岩倉組ホモン工場

ご視察ののちご退道。（四泊五日）（ルビィ引用者）

十八日付の新聞記事にあるように、宮中行事との関係から日程が二日繰り上がったが、視察先は最終的なものではなかった。

執筆者註 昭和三十六年第一二回植樹祭が支笏湖畔モラップ山麓に決定した経過については資料が乏しく判然としない。しかし、平成十九年第五八回の苫小牧東部地域・つた森山林隣接地における植樹祭開催申請が十五年で決定が十六年八月だったこと、昭和六十二年第十一回育樹祭の決定が五十九年八月だったことを考え合わせると、第一二回の植樹祭も昭和三十二年頃から開催協議などの動きがあったと思われる（『第十一回全国育樹祭記念誌』、『第58回全国植樹祭開催概要パンフレット』参考）

## 台風15号と植樹予定地

昭和四十四年発行『千歳市史』、五十八年発行『増補千歳市史』いずれにも植樹祭についての記述があるが、なぜ支笏湖畔モラップ山麓が会場に選ばれたかについては触れられていない。少し考察してみたい。

北海道林務部『植樹行事実施概要書』に大会の趣旨を見ると

（略）北海道においては、昭和29年15号台風により、森林は有史以来の災害を受けて、林力は急減したため、荒廃林地における災害が頻発し、さらに、木材供給力の低下によって、経済発展を阻害する結果を招くに至り、ここに拡大造林を中心として、林力増強の推進を痛感する次第となった。

とあり、森林生産力は低位生産の天然林から人工林に旺盛な意欲と技術によって転換することが肝要であるとしている。このことから北海道における植樹祭の目的は、台風15号からの復興が主な目的であったと理解することができる（林野庁ホームページ「全国植樹祭」（参考）全国植樹祭開催一覧・第二二回テーマ「積雪寒冷地帯の拡大造林と屋敷林の造林」）。

昭和二十九年九月二十六日に来襲した台風15号は、いわゆる風台風で水害の被害はほとんどなかった。台風は北海道に接近したころピークを迎えた。最大瞬間風速は積丹の神威岬灯台で観測した六三・二メートル、道内各地での風速は三〇メートル以上となった。岩内では市街地の八割にあたる三〇〇〇戸余りが焼失、青函鉄道連絡船五隻が沈没し一四三〇人が死亡・行方不明となった。また、支笏湖周辺のやせた火山灰地では根を張れない全山の太木が根こそぎ倒された。土ごとめくりあがった一〇メートル以上もある太木の根の深さはわずかに三〇〜四〇センチしかなかった。台風15号の被害が大きくなった理由として、この年の五月暴風に痛めつけられた森林が再び強烈な風速と緩慢な進行速度によって襲われたことにあった。

これが台風15号の概観であり、水上勉の小説『飢餓海峡』が生まれる題材となった。四年後の昭和三十三年、気象庁は被害の大きさに鑑み、最も多くの死者・行方不明者一五五人を出した鉄道連絡船の名から「洞爺丸台風」と命名した。

札幌宮林局が編集した『風害8000万石・北海道森林風害記録写真集』には「林業面においては生産諸施設の機能の麻痺とともに、被害面積48万ha、被害材積8千万石に及び有史未曾有の惨害を招来し、特に大雪山を中心とする石狩川その他重要水源地帯の原生林、樽前山麓火山灰地帯の森林を始めとし、道内有数森林地区を一朝にして倒壊し、風倒、挫折墨壘として荒涼たる姿に変じた」とあり、空中写真はマッチの軸を机の上にはばらまいたような状態を写した。樽前山麓の被害は口無沼周辺が最もひどく、厚平内、樽前国道沿い、支寒内、幌美内と広範囲で四五〇〇センチ、蓄積量では三七〇万石に及んだという。風倒木処理のため設定された林道、作業道が今も迷路のように縦横に走る。また、支寒内の風倒木は陸路が未整備のため玉切つて素材丸太にし、湖岸で筏に組み動力船で千歳川口に曳い

た。北ガス文化ホールの位置にあった恵庭営林署千歳伐採事業所千歳貯木場の引込線では長物車で風倒木輸送の臨時貨物が組成され、千歳や苫小牧は風倒木景気に沸いたという。(執筆著註 1石(材積) ≡ 0・278立方尺)

風倒木の処理は昭和三十二年に完了、復旧造林が三十五年まで続けられた。伐採事務所や造材飯場、蹄鉄小屋、鍛冶小屋などが立ち並んだ口無沼のほとりに沙流川石に刻まれた樹魂碑がある。筆者は口無沼を訪れるたびに、苫小牧営林署長金田一<sup>かねだはじめ</sup>による背面の碑文が切なくも美しいと感じる。

#### 口無沼事業所跡

十五号台風で倒れし木々よ

タルマイ山麓に再び美林が育成されん

風倒木整理の中心基地なりしこの地に

一九六五年五月二十四日植樹行事の日

その霊を偲び建之

(表紙裏・樹魂碑写真参照)

植樹祭会場選定について考えてみたい。

候補地の選定に当たって先ず台風15号の被災地であること。道内各地からの参加の利便を考え植樹会場近くまで鉄道の利用が可能なこと。招待者を宿泊させるため周辺に宿泊施設の確保が可能であることも要素となったであろう。また、両陛下、中央招待者が空路到着する千歳飛行場から遠隔でないことも旅程などから重要な要素だったに違いない。さらに行幸啓の御泊所、警備が困難でないことを勘案して第一二回植樹祭会場が支笏湖畔モラップ山麓となったと考えられる。

**モラップ部分林** 植栽予定地は千歳市営モラップキャンプ場の北東、ピスンモラップ南西山麓に位置する国有林苫小牧事業区314(現・1314)林班の一部七・八八〇一<sup>ハ</sup>と1002(現・6002)林班の

一部一・三一五四<sup>ハ</sup>、合わせて九・一九五五<sup>ハ</sup>の広さだった。予定地は台風15号被災地で湖面から五〇<sup>ハ</sup>ほど(海拔三〇〇<sup>ハ</sup>前後)の緩やかな傾斜地となっていて、中央部を丸山とモラップを結ぶ林道が横断する。予定地西端からは湖へ急坂となり、東端からは八<sup>ハ</sup>の樽前登山道が延びる。

この地を北海道主催の植樹祭会場とするため、昭和三十五年九月一日に愛林緑化思想<sup>こころ</sup>昂揚記念部分林として札幌営林局(現・北海道森林管理局)と部分林の設定契約をなした。部分林とは分収林と同意で、国有林野に国以外のものが造林、その収益を国と造林者で分収する森林を指すもので、モラップ部分林と呼ばれている。伐期は七五年とされたが、記念林としての存置も検討するとした。

台風15号被災地の復旧造林は昭和三十五年までに終わったことは前述した。植樹祭会場となる予定地は第一二回植樹祭のために復旧造林作業が除外された地であったことが推察できる。

九月十一日から植樹祭会場の整備が始まった。『植樹行事実施概要書』

### 植樹祭会場見取図

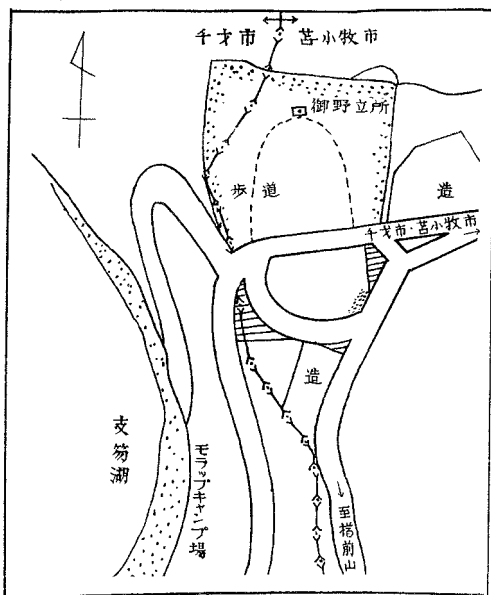


図1 植樹祭会場見取図(『行幸啓概要(図面関係)』を一部修正)  
行政界は林班界による 千歳市域が1002林班、苫小牧市域は314林班となる  
「造」は復旧造林済地を表している

では「地拵及整地」地拵は全刈焼払とし、当日会場に充当する部分は地上の抜根、倒朽木を除去し、特に入念な整地を行う」とされた。

モラップ周辺の造林についてみる。

支笏湖周辺の北海道官有林は皇室財産の安定確立のため明治二十三年九月に御料局御料林に編入された。三十七年には植樹祭会場となる314林班右隣の315林班に御料局札幌支庁苦小牧出張所（後・苦小牧営林署）初の造林が行われたことで知られる。このことから314林班も最も古い時代の造林地と考えられる。当時、苗圃はまだなく山間から丁寧に採取されたクロエゾマツ（Ⅱエゾマツ）の山引苗<sup>やまびきなえ</sup>を天然更新を補助するようなことであった（同年、御料局改組→帝室林野局）。昭和二十二年四月、宮内省の廃止によって御料林は農林省所管の国有林となり現在に至る。

丸山は昭和十九年に苦小牧の字名となった。それ以前は山線の駅名から十三哩<sup>マイル</sup>（山線苦小牧からの距離）と呼ばれていた。国有林苦小牧事業区314林班の所在地も丸山である。なお、丸山は山火事監視望楼・丸山遠見が建っているお茶碗を伏せたような三三七の山の名からきている。

**アカエゾマツ** 植樹祭で用いられた苗木はアカエゾマツであったが、樹種はどのように決まっていたのだろうか。

『森林復興の軌跡』「IV樽前山麓の風害跡地復旧」に当時、苦小牧営林署長だった金田一へのインタビュー（H6・10）に答えがあった。『森林復興の軌跡』は洞爺丸台風から四〇年を記念して編集された。

—（略）アカエゾマツですがこれはあらかじめ植栽樹種として決まっていたわけですか。

【金田一】アカエゾマツがあらかじめ植栽樹種として決まっていたわけではありません。トドマツについては、開芽時期と植樹祭の日が重なりました。アカエ

ゾマツは、トドマツより開芽時期が遅いということで植栽樹種として採用したわけです。また、幸い、丸山苗畑にアカエゾマツの養苗がありました。

北海道の厳しい気象条件は造林の隘路となっていて、開芽時期は晩霜害と密接な関係があった。水井憲雄は『光珠内季報』で林木の霜害について次のように述べている。

（略）トドマツの場合、マイナス5℃、2時間に耐えるのが開芽10日以前であり、マイナス10℃、8時間で頂芽の凍死が始まるのは40日前である。もし開芽の時期が5月中旬と考えるなら、その40日前は4月上旬となり、その頃は造林地においてマイナス10℃となることは十分に考えられ、その頃から被害をうける可能性がある。またアカエゾマツはマイナス5℃、2時間で開芽8日前から頂芽の凍死が始まるが、開芽時期そのものが遅いのであまり霜害をうけない。しかし、低下する温度によって、やはり限界があるので、極度の低温にさらされると被害をうける（S13・6・18北大苦小牧演習林晩霜大被害）。

今までも高海拔地帯に植栽されたアカエゾマツに大きな被害がでた例がある。（原文では「マイナス」は「一」と表記）

植樹祭では霜害を考慮し、苦小牧営林署丸山造林事業所苗畑産五年生二回床替のアカエゾマツ苗木が使われた。なお、アカエゾマツはクロエゾマツとともにエゾマツと総称され、昭和四十一年に「北海道の木」に選定されている。

## 支笏湖畔の準備

**道道支笏公園園線** 昭和十年に千歳市街から中モラップまでの自動車道が出来上がったことは述べた（十二年に現・休暇村周辺まで延長、二十一年に現・翠明橋の位置に人道橋架橋、二十三年には自動車通行が可能となる）。この道路は村道千歳支笏湖街道と呼ばれ、十三年九月二十八日地

方費道（＝県道）49号千歳支笏湖線に昇格、二十九年三月三十日道道となる。

千歳飛行場に到着された両陛下は、千歳から支笏湖畔の別邸に向かうには道道支笏湖公園線を通行するのが至近であるが、当時の道道は昭和三十四年から舗装工事に着手したばかりで、大部分は火山灰からなる黄塵万丈のそろばん道路で御料車が通行するには難があった。道道苫小牧支笏湖線の丸山から植樹祭会場に至る林道についても同様の状態で、一度に多数の車を通すことは視界不良となつて事故が起きても不思議ではないと関係者はさじを投げた。

このため往路は、北海道中央バス東烏柵舞停留所から烏柵舞林道に入り藤の沢の恵庭営林署藤の沢事業所廠舎・苗畑を経由して丸山に至る北五条林道、南七条林道を使い、苫小牧営林署丸山事業所から道道苫小牧支笏湖線に出て湖畔に向かうこととした（当時、藤の沢には水明小中学校藤の沢分校、渡部木材藤の沢事業所があった）。また、復路は道道支笏湖公園線に十分なるホコリ止めを行つたうえ通行することとし、王子製紙のパルプ廃液の散布も考えられた。植樹祭行事本番にあたつて往路の林道一七<sup>キ</sup>は札幌営林局が、復路の道道二八<sup>キ</sup>には北海道土木現業所がそれぞれ補修のうえ通行三日前から塩化カルシウムがホコリ止めとして散布された。なお、道道支笏湖公園線全線の舗装は昭和四十一年八月のことであつた。

**倶楽部別邸の移築** 王子製紙苫小牧工場の操業記念日となつてゐる明治四十四年九月十二日に皇太子殿下（後・大正天皇）が工場を視察した。この時の迎賓施設が倶楽部であつた。当時、苫小牧を訪れた皇族、高官は支笏湖を訪れるのが常であつたが湖畔には迎賓のための施設はなかつた。

昭和七年に閑院宮殿下のご来道が予定され、その御泊所として支笏湖畔に建設されたのが総檜造りの倶楽部別邸（別邸）で五年に完成した。

支笏湖畔では昭和二十七年に集団施設地区が計画され、二十九年（or S 32）には地区が指定された。結果、別邸は商店街区域の湖側となり静かさを保ちづらい面がでてきた。このため、支笏湖畔モラップ山麓で開催される植樹祭のため両陛下がご来道されるのを機会にチリセツナイ川の右岸、ふ化場支笏湖事業所上手の高台に移築することとした。

昭和三十五年八月から敷地の整地に取りかかり、その年の内に移築と約一六〇平方<sup>メ</sup>の離れ座敷を増築し別邸は一〇〇〇平方<sup>メ</sup>ほどの広さとなつた。増築部分は本道産のトドマツ、アカマツの板壁で山荘風の優美な建物であり、イタヤカエデ、クリ、ナラの林に囲まれていた（旧別邸・表紙地図では山線鉄橋右に苫小牧荘と表示。現状、四阿<sup>あずまや</sup>のある中央広場）。

また、昭和三十年に支笏湖小学校の旧校舎を改修して日本ユースホステル協会初の専属施設となつた支笏湖ユースホステル（ユース）が、三十五年七月に全面改築し田上義也設計による赤い三角屋根の国内初の直営ユースとして竣工した。さらにユースの前には二十九年建設の千歳交通支笏湖営業所があつたが、三十五年に中央バスが駐車場を新設し現在の広さとなるなど植樹祭の開催は支笏湖畔を大きく変えた。

## 第二回植樹祭

**行幸啓日程**（「天皇后両陛下下行幸啓御日程」参考／時刻＝千歳関係分のみ）

二十三日 皇居御出門 10・45 羽田空港発 11・25

千歳飛行場着 12・55 別邸着 13・50

二十四日 別邸発 11・10 植栽地着 11・30 御野立所着 11・36

天皇陛下植樹 11・38 皇后陛下植樹 11・43

参会者一同植樹 11・48～12・20

御野立所発 12・25 植栽地発 12・30 別邸着 12・50

二十五日 別邸発 9・10 林業試験場北海道支場（御播種） 札幌神社（現・北海道神宮） 北海道体育祭（円山陸上競技場） 御泊所・札幌グランドホテル（皇后陛下・日赤道支社社員大会）

二十六日 北海道庁 北海道大学クラーク会館／植物園 御召列車 C 57149

〔築〕 札幌駅発 ↓ 栗山駅・王子製紙林木育種研究所（旧・森林博物館）  
↓ 登別駅着 御泊所・登別グランドホテル

二十七日 苫小牧市立ひまわり保育所（旧・苫小牧授産場付属保育所） 苫小牧工業港（建設中・S 38 第一船入港） 苫小牧市役所

千歳飛行場発 13・50

羽田空港着 15・20 皇居御還幸 16・00

**行幸啓下検分** 昭和三十六年四月一日午後、北海道警察の御道筋警衛実地調査が行われ、支笏湖に一泊し別邸を視察後、苫小牧に向かった。

十日からは四日間の日程で下検分が実施され、宮内庁からは侍従のほか総務課長、事務官など五人に、皇宮警察、警察庁、国鉄本社、林野庁を加え総勢一二人が来道した。千歳市内では飛行場のほか、植栽地、別邸が下検分箇所とされた。下検分は道庁、道警、市町村関係者を含め総勢五〇人前後となった。

**御召機ジェット DC・8** 植樹祭当時、千歳飛行場着発旅客機は全てプロペラ機で降乗は空自千歳基地山形格納庫の横にあった民航待合室前で行われていた。先ず、千歳着発旅客機のジェット化を振り返ってみたい。

全日本空輸は昭和三十四年十月のレシプロ機コンベア 440 メトロポリタンに続き、翌年八月にはジェットエンジンでプロペラを回すターボプロップのビッカーズバイカウント 744 を札幌（千歳）便に就航させた。日本航空のダグラス DC・4、6B では速度、与圧、静粛性などの快適性で全日空機に対抗できず劣勢を強いられ、日航はすぐに国際線から DC・

7C セブンシーズ（レシプロ）を転用した。三十六年七月、全日空はバイカウント 828（ターボプロップ）でさらに攻勢をかけた。日航は全日空のターボプロップ攻勢に対する最後の切り札として、東南アジア線用に発注したコンベア 880 ジェットアローを国内線初のジェットとして千歳便に就航させたのは植樹祭から四カ月後の九月のことだった。

千歳飛行場ジェット就航に先立ち、植樹祭の御召機には日航ジェット旅客機 DC・8・33・JA 8005 MIYAJIMA（宮島）が充てられた。操縦は旧・日航創立時にノースウエストからウェットリスされた機体にパイサーとして乗組んだベラン江島三郎だった。（宮島）は日航 DC・8 一番機 FUJI（富士／S 35・7 登録）とともに昭和三十年に第一次発注された四機 of 四番機として、三十五年十一月に登録されたばかりの新鋭機だった。三十六年四月十九日には重量が DC・7 の倍もある大型の DC・8 が千歳飛行場において安全に着発できるかの試験飛行が実施された。当時の滑走路は現在の西側一本だけで耐荷重も低いものだった（この時点で東側滑走路は DC・7 対応のため十二月の供用に向け造成中、西側的大型機対応のためのオーバーレイ補修は三十九年のことである）。

このようことから（宮島）は千歳飛行場初のジェット旅客機だった蓋然性が高い。なお、復路御召機も江島機長操縦の（宮島）が充てられた。

なお、DC・8 の千歳便への就航は昭和四十五年四月のことである。ちなみに同年、日航のロゴマークである鶴丸を垂直尾翼に描いた初の機体は SHIKOTSU（支笏／DC・8・55 JA 8016・S 41 就航）で、文化二（1805）年シコツに鶴が多く生息することに因み「シコツに鶴」「鶴は千年」「千歳」と命名された地名の由来にも重なり一興である。

**市民の歓迎と堵列** 両陛下の奉迎は飛行場から御泊所と植栽地のある支笏湖畔に向かわれる五月二十三日（奉迎御道筋Ⅱ駐機場・現・第一通用門

・現・平和官舎敷内・正門・本町五丁目・錦町十字街・大和町）、支笏湖畔から御播種のため札幌市豊平の林業試験場北海道支場に向かわれる二十五日（大和町・錦町十字街・北信濃）、苫小牧から還幸啓のため飛行場に向かわれる二十七日（朝日町八丁目・本町五丁目）と三回実施された。奉迎はほかに蘭越小学校前、湖畔支所前（現・駐在所横）から別邸入口、水明郷第一発電所前などにおいても行われた。一般市民の奉迎は御料車進行方向右側の沿道を原則とした。御料車は溜色たれいしよと呼ばれたあずき色の一九三〇年代前期型ダ임ラー・ベンツ製メルセデス・ベンツ770Kで、ボンネットに天皇旗、ラジエターグリル前方などに菊花御紋章をつけていた。



写真1 北栄小学校児童の奉迎(昭和36年5月25日撮影)  
国道36号学田の坂における奉迎の様子 校舎は昭和29年建築で自校式給食設備を有するモデル校だった

四月十八日起案の「植樹行事の事務遂行計画(案)について」では日の丸の小旗三万枚準備とある。当時の千歳市の人口は約四万五〇〇〇人、小旗の枚数からも多くの市民が奉迎に参加したことがわかる。また、五月二日には市内小中高各学校長宛に奉迎協力文を發した。奉迎に参加したのは、二十三日千歳小（5月末在籍者数1210）、千歳中（1239）、千歳高校（全日制837）の三校、二十五日が緑小（707）と北栄小（1347）、二十七日が末広小（756）と青葉中（795）となっていた。日の丸の小旗は郊外の小中学校に

も全校児童生徒数分が配布された。新聞報道によると二十三日の奉迎者は二万人余に及んだという。

蘭越小学校前にはアイヌの人たち一〇〇人ほどと校長に引率された全校児童一〇余人が車列を待っていた。車列の通過とともに児童たちは一カ月前から練習したというハーモニカで「さくらさくら」を一生懸命に演奏、御料車は徐行し両陛下はにこやかに手を振り児童に応えたという。

堵列とれつとは、栄誉礼に該当する身分を有する人物の送迎、及び敬意を表するため大勢の人が垣（＝堵）のように横に並んで整列するの意で、植樹祭行幸啓時には陸空自衛隊在千歳部隊などによって実施された。

資料によると二十三日は米軍管理の千歳飛行場正門では米陸軍第一二野戦通信部隊（ASAChtiose）と空自千歳基地所在部隊の合同儀仗隊が、春日町から大和町間には陸自東部隊二五〇〇人、二十五日は北栄町から北部隊正門通りに北部隊二〇〇〇人が、二十七日には朝日町八丁目からママチ橋（グリーンベルト）間に東部隊二五〇〇人が堵列したという。また、陸自は通信支援として御道筋の連絡体制のため要所に無線機を配置したほか、沿道の秩序維持に市役所などとともに当たった。

**植樹行事** 五月二十三日、道内参会者のうち稚内・深川、網走・滝川、函館・長万部、根室・富良野間各駅発の国鉄団体専用臨時列車（団臨）「緑の列車」を利用できる人は列車で、後志、日高など団臨を利用できない人は札幌、苫小牧に前泊し会場を目指した。二十四日朝、稚内と網走からの団臨は千歳に、ほかは苫小牧に着いた。最も遠隔な根室からは二〇時間の長旅となった。参会者は団臨からバスに乗り換えてモラップに向かった。

千歳着の二本の団臨は、約一九〇〇人を乗せて午前七時三十分前後に到着した。参会者を運ぶ札幌市営バス、中央バス、国鉄バスの貸切車四二台



写真2 植樹祭会場(昭和36年5月24日撮影)  
 参会者が植樹を終え、両陛下が御野立所を發たれる直前の様子  
 七稜星の北海道旗制定は昭和42年である

別邸を午前十一時十分に發った御料車の車列は分岐点を經由せずに、苫小牧市道（現・モラップ1号線）を通り営林局林道（現・支笏国道）に入った。樽前登山道路（15号台風風倒木処理↓林道昇格、S32拡幅↓苫小牧市営バス運行、S41丸山・五合目↓道道樽前錦岡停車場線、H6↓道道樽前錦岡線）入口付近の乗用車駐車場外側に新設された半円形の車道

は、駅前ロータリーに収まらず第2停車場線（現・中央大通）の千歳川寄りに待機した。参会者を乗せたバスは七〇分をかけ午前九時頃までにキャンプ場入口の会場駐車場に到着した。一部、湖畔に到着したバスの乗客は支笏湖観光運輸の遊覧船八隻でモラップにピストン輸送された。モラップは、曇りがちながらも薄日が射していたが次第に雲が立ち込めて五月末とは思われぬほどに空気は冷たく、植樹会場から仰ぎ見る樽前、風不死の沢筋にはまだ雪が残っていた。千歳市は会場に案内所、湯茶接待所を設け女子職員が接待に当たった。駐車場では陸自北部隊隊員が整理を担った。午前十時三十分から始まった国土緑化大会は予定どおり十一時二十分に終わった。

を通り、林道から御野立所<sup>おのたてしょ</sup>に通じる逆U字型の両陛下用歩道モラップ側に十一時三十分に着された（御野立所＝天皇の野外休憩所）。

両陛下は町村金吾北海道知事の先導で二〇〇メートルを歩き、会場北端の御野立所に到着された。御野立所では机に置いた天皇陛下下の帽子が一瞬の強風にあおられ飛んでしまったというエピソードが残る。

陸自音楽隊伴奏による君が代の斉唱とともにボイスカウトによって御野立所後方の国旗掲揚塔に日の丸が揚げられた。両陛下は清瀬一郎国土緑化推進委員会委員長（衆議院議長、東京裁判東条英機元首相主任弁護士）と道知事の介添えで三本のアカエゾマツの苗木を「森」の字の形で植栽、続いて参会者一万二〇〇〇人も両陛下が見守るなか同様に三本の苗木を植栽した。このなかには千歳からの一二五人も含まれた。

参会者が植栽を終えると寒さに震えながら白いブラウス姿の女子学生二〇〇人ほどと学生服姿の男子学生一〇〇人ほどが、「朝のひかりはるかなる海を照らし」と『北海道讃歌』を合唱、参会者の万歳のなか両陛下は十二時三十分会場を後にされた。

別邸に戻られた両陛下はご昼食の後、国土緑化大会で表彰された林業功労者を激励された。午後二時半からは、千歳から別邸に向かう御料車に同乗した館脇北大教授（植物園長）の案内で水明郷の原始林へ散策に出られ天皇陛下は生物学研究者としてのひと時を過ごされ、皇后陛下は山中に咲き乱れるシラネアオイやミヤマエンレイソウなどのスケッチを楽しまれた。

御製 斧入らぬ林をゆきて驚きぬしらねあふいは群れ咲きにほふ

灯籠流し 植樹祭日程における地元行事として支笏湖自治振興会（S33設立）では、別邸にご宿泊される両陛下の旅情をお慰めしようと灯籠流しを計画、千歳市と千歳観光協会がタイアップした。支笏湖における灯籠流

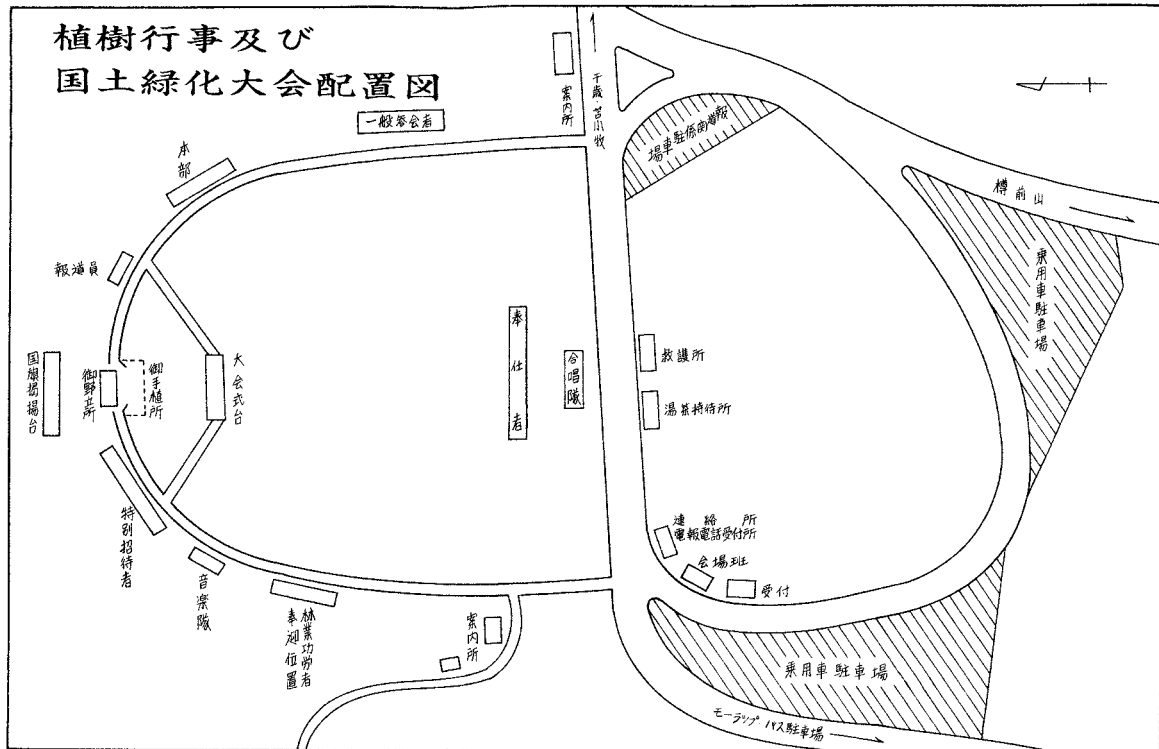


図2 植樹行事及び国土緑化大会配置図（『行幸啓概要(図面関係)』）  
歩道モラップ側案内所の位置に写真3の植樹祭記念碑が建っている

しは例年七月第一日曜に開催されていた支笏湖湖水まつり（S26）に棧橋から五〇〇個の灯籠を放流する形で催されていた。

地元行事実施に当たり、自治振興会員と王子製紙千歳川発電所の協力を得て新たに五〇〇個ほどの灯籠を作った。灯籠は二〇センチ四方、厚さ一センチほどの雑板にジュースの空き缶を取り付けた簡単なものだったが、重油と灯油を混ぜて燃料とし一時間ほど灯るようになっていた。

当初は二十三日に行うこととしていたが波が高く二十四日となった。夕刻の雨が上がったのを見計らって始まった灯籠流しは、別邸の沖で支笏湖観光運輸の遊覧船みどり丸（元・菱中通船部所属／鋼船・27ト・85人乗）から次々と放たれ、湖面に幻想的な風景が映し出された。

午後八時過ぎ、電燈が消された別邸の離れの広縁には、灯籠流しをご覧になる両陛下を囲むように四、五人のシルエットが浮かんだという。

灯籠流しは翠明閣に宿泊した供奉員のほか多くの観光客も楽しんだ。

翌日、陛下から侍従を介して「灯籠は糸で繋いでいるのか」とお尋ねがあったという。また、両陛下が別邸滞在中に第一樽前丸で湖上遊覧される計画もあったが天候が悪く中止となった。

御製 湖をわたりくる風はさむけれどかへでの若葉うつくしき宿

**すずらん献上** 天皇陛下をはじめとする皇室に北国の初夏の便りを届ける千歳市のすずらん献上は、半世紀以上の長きに亘っている。その始まりは支笏湖畔モラップ山麓の植樹祭にあった。

すずらんの献上は、植樹祭でご来道された天皇陛下がすずらんをご覧になりお気に召されたことが発端だとされるが定かではない。しかし、植樹祭が開催された昭和三十六年の五月二十四日前後には、千歳地方ではすずらん狩りが始まっていた。千歳周辺では演習場のほか、支笏湖周辺の国有

林でも野生種のすずらんが自生することから天皇陛下が皇后陛下とともに水明郷の森でご覧になった可能性は十分にある。

すずらん献上初出の『千歳毎日新聞』を見てみたい。

スズランとカラー 千歳市 近く献上手続き

千歳市では、近く両陛下下行幸啓に対する献上品としてスズランのハチ植えと支笏湖風景のカラー写真集を差し上げることを決めた。同献上品は、米田市長が近く上京して宮内庁に参上、御礼言上する時持参する…(略)(S 36・5・25付)

供奉員にもスズラン きょうお召機に積む

(略) 宮内庁と総理府の供奉員五十人の労をねぎらい、スズランのハチ植えをお土産に贈った(略) 五十個のスズランは、お召機の荷物室に積まれた(S 36・5・27付)

『千歳毎日新聞』は、献上の事実を淡々と記事にしているばかりで、すずらんを選定した理由は見当たらない。この年の満開は六月三日頃ですずらん狩りは十一日頃まで楽しめたという。

献上すずらは初めてのころは野生のものだったが、すぐに市内の農家が温室栽培したドイツスズランに代わった。ドイツスズランは観賞用で日本野生種に較べると大型で香りも強いとされる。日本野生種は近年の林地開発などで生息域が減少しているといわれる。

現在、皇室への献上先は天皇后陛下(宮内庁)、皇太子同妃両殿下(東宮御所)、秋篠宮家、常陸宮家で、すずらの輸送には当初からANAの協力を得ている。また、全国の自治体で皇室に花を献上しているのは千歳市だけだという。

平成二十六年のすずらん献上を『北海道新聞』は次のように伝えた。

千歳産のスズラン今年も皇室献上へ

【千歳】市は19日、千歳産のスズランを皇室に献上するセレモニーを新千歳空

港で行った。山口幸太郎市長が上京し、20日に宮内庁の担当者に手渡す。スズランの献上は、1961年に昭和天皇が支笏湖畔で植樹を行ったことを機会に始まり、今年が54回目。(略)(H 26・5・20付)

二十日のすずらん献上に対して翌日、今上陛下のお礼のお言葉が宮内庁から千歳市に伝えられた。

### 育樹祭までの植栽地

植樹行事記念碑 植樹祭に際して天皇陛下は「ひとくくとあかえそ松のなへうゑてみと里のもりになれといのり津」と詠まれた。

植樹祭一年後の昭和三十七年五月二十四日・北海道緑の日、小雨交じりのなか御野立所跡に通じる植栽地内歩道モラップ側入口の左方で町村知事、米田市長らが出席して御製を刻んだ植樹行事記念碑(植樹祭記念碑)が神式に則り除幕された。



写真3 植樹祭記念碑除幕式(昭和37年5月24日撮影)  
小雨交じりの中、神式に則って除幕式が挙行された 周囲は現在、うっそうとした森になっている

植樹祭記念碑は、コンクリートに鉄平石を張り付けた基壇の上にコンクリート三段の台座、その上に御影石の上台と碑本体が載るといふ六段重ねで二メートルほどの高さがある。碑本体は高さが一メートルほどの四角錐台で正面に御製、背面には建立の趣意が陰刻されている。

昭和三十六年五月二十四日/天皇皇后両陛下のご臨席を／あおぎ山水清秀のこの地に於て/第十二回植樹行

事が行われ／アカエゾマツ三万六千本を植栽／したよってここに碑を建て／永くこれを記念する

昭和三十七年五月二十四日／北海道知事 町村金吾

平成十八年にコンクリート台座三段が一段に成形され、台座正面右に真鍮の御製解説板が付けられた（「人々とあかえぞ松の苗うえて緑の森になれ」とのりつ）。

**成育の遅れ** 『北海道新聞』は昭和三十九年に特集記事「緑は泣いている」を連載した。シリーズ一回目の八月八日付紙面では「植えっぱなしは困る 両陛下のマツも生育遅れる」と、緑の羽根と緑化思想の普及に絡め植栽地の現状を酷評した。

（略）それから三年余。今この記念すべき地でのアカエゾマツの成育ぶりは、お義理にもよいとはいえない。（略）植樹祭向けに地ならしたもののだが、そのとき腐植土の下にあった火山灰が表面に出てきたため、せっかく植えた木の根つきが悪く、根づいても肥料分の不足からひ弱に育った。しかも湖畔から吹き上げる寒風は幼木を痛め、一年たった三十七年春には三分の一以上が枯れていた、という。（その後、徹底した補植、施肥、冬はワラツトによる防寒で何とか生き延びたがかなり遅れている。お手植えの松は金網で囲われているため順調だが、ほかは一年から二年の遅れが出ている。一ヶ所にはなっているところ四〇から七〇センチぐらい）本道の“緑化運動”の聖地というには、いかにも“お粗末”な感じだ。

（一）（内筆者要約）

アカエゾマツは開芽時期が遅く耐寒性があるということで植栽樹種として選定されたが、当初は保育が悪く三分の一が枯れた。また、植栽地は自然環境が思いのほか厳しかったことがよくわかる事象である。

**北海道百年** 昭和四十三年は、明治二年に蝦夷地を北海道と改め、開拓使をおいて開拓に着手してからちょうど百年となった。

北海道百年という意義深い時にあたって、北海道では次の時代に誇りうる開拓記念館（H27改称↓北海道博物館）、野幌森林公園の造成、百年記念塔の建設、赤れんが庁舎の復元、『新北海道史』の編纂などの記念事業を実施した。千歳においても記念祝典と臨席のため来道された両陛下がお手植えの松をご視察、植栽地が百年記念の美林に選定されたほか、地方記念施設として支笏湖青少年研修センターが建設された。

・植栽地・北海道の美林に選定

『北海道の名木美林』美林の部（北海道林務部編集）

モーラップ記念林（愛林緑化思想昂揚記念部分林）…一部略

●所在地〓苫小牧市丸山 千才市モーラップ●樹種〓アカエゾマツ●現状〓樹高〓158cm、当年伸長〓39cm、本数〓34、697本、林令〓7年

記録〓昭和36年5月24日、第12回国土緑化大会植樹行事が天皇后両陛下御臨席のもとに、道内外招待者および奉仕者9、983名の参加を得て、支笏湖畔モーラップにおいて実施された。／同地は国有林で、道は部分林契約を締結し、苫小牧林務署が植栽木の管理撫育を行っている。／湖面を見おろし、樽前、フツプシ、恵庭岳を望む風光明媚な地のなかで、活着、生長ともに良好な生育をなし、若々しい美林となっている。●昭和36年～43年 毎年撫育作業を行い現在にいたる（下刈年2～3回、アブラムシ駆除、施肥など）

当該書には名木が一〇〇と三〇〇カ所の美林のほか、一九カ所の並木などが選定されているが、幼木はモーラップ記念林だけである。植樹祭の実施が北海道林政史においていかに大きな事業だったかが推し量れる。

・植栽地・両陛下ご視察 八月三十一日、北海道百年記念祝典ご臨席のため両陛下は御召機日航DC-8-55（BANDAI（磐梯））で午後二時十五分、植樹祭以来七年ぶりに北海道の地を踏まれた。市街地沿道の日の丸の波と陸自隊員の楮列のなか御料車ロールス・ロイス・ファントムV

1961年型は、昭和四十一年に全線舗装になった道道支笏湖公園線へと進み三時過ぎ支笏湖畔の御泊所である別邸に着いた。

この日、支笏湖の天候は厚い雲に覆われていたが、両陛下ご到着のころには樽前山、恵庭岳も山容を望めるまでに回復していた。拝謁、道政奏上を受けられたのち両陛下は午後四時、植樹会場の支笏湖畔モラップ山麓に向かわれた。御料車は苫小牧市道を経由して昭和四十年に道道洞爺湖支笏湖線に昇格した元の林道に入ったが未だ舗装はされていなかった。

両陛下は町村知事の案内で、樹高が二〇五センチほどに生育されたお手植えの松をご覧になられた。天皇陛下は周囲の草木を身かがめて観察されるなど、生物学研究者としての学究と植物に対する愛情のほどがうかがわれたという。四時三十五分には別邸に戻られた。

・御召列車の運行 九月一日、夜来の雨も昼前には小降りとなり天皇陛下は晴れ間をみて別邸の庭を散策、皇后陛下は湖畔の風景をスケッチされるなどして過ごされた。

両陛下は翌日の北海道百年記念祝典にご臨席のためは午後二時三十分、千歳駅1番線（駅舎側）発のディーゼル機関車牽引の御召列車で札幌に向かわれ三時二十六分に到着された（着1札幌駅舎側1番線）。DD51初の御召機となった548号機（旭）は前面に国旗を交差、菊花御紋章をつけ、客車は供奉車、随従車など四両の中間に御料車1号を組む1号編成だった。当時、難所が少ない道央、道南では未だDD51は運用されていなかった。

一日、二日の御泊所は札幌パークホテルだった。

二日午前に道庁とサッポロビール工場をご視察、午後には北海道神宮をご参拝後、円山陸上競技場で開催された百年記念祝典にご臨場された。

その後、両陛下は道北をDE10重連の御召列車で移動、地方視察され

た。三日、御召列車は旭川へ、五日は上川から豊富に到着された。六日には稚内から天北線を経由、旭川を経て札幌に戻られた。

最終日となる七日は、羊が丘の農林省北海道農業試験場でファイトロシ（人工気象室）をご視察、午後零時千歳空港発の日航機でご退道された。この間、稚内公園では樺太同胞の霊を慰められた。また、御召列車ご乗車中は発着駅と滝川、名寄、音威子府、幌延の各駅で特別奉送迎者のご送迎を受けられた。なお、御召機DD51548号機は現在、三笠鉄道記念館クロフォード公園（旧・三笠駅）に静態保存されている。

天皇家のご視察 ・皇太子殿下（現・今上陛下） 昭和四十九年八月四日から六日までの間、殿下は陸自北海道大演習場東千歳地区内の千歳原で開催された第6回日本ジャンボリーご臨席と千歳地方のご視察を兼ね別邸に滞在された。

八月四日午前十一時三十五分に日航機で千歳に到着された殿下は千歳市工場団地のサントリー千歳プラント（現・日本アスパラ）と北海道松下電器（現・パナソニック）をご視察後、午後三時五十分には御料車で支笏湖畔モラップ山麓に向かわれた。

植樹記念碑をご視察後、お手植えの松について道林務部長と札幌営林局長の説明を受けられた。アカエゾマツは三〇センチほどに生育していた。午後五時過ぎ、別邸に到着された（詳細『志古津』第20号参照）。

・浩宮殿下（現・皇太子） 昭和五十四年八月三日午後四時半、殿下は日航機で千歳に到着された。ご来道の目的は、四日に真駒内公園屋内競技場（現・真駒内セキスイハイムアイスアリーナ）で開催される第四回世界剣道選手権大会開会式と、五日に洞爺少年自然の家で開催される第一〇回北海道スポーツ少年大会開会式に出席されるためであった。

五日には札幌から洞爺村（現・洞爺湖町）に向かわれる途次、支笏湖畔

モラップ山麓に立ち寄られ両陛下お手植えの松と植樹祭記念碑をご覧になられた。六日の午後四時過ぎには宮沢教育長の説明で美々貝塚をご見学後、空港に向かわれた。

・礼宮殿下（現・秋篠宮） 昭和五十六年八月六日、両陛下お手植えの松と植樹祭記念碑をご視察された。

## 第一回全国育樹祭

全国育樹祭は、天皇皇后両陛下が植樹祭においてお手植えの木々の枝打ちなどのお手入れを皇太子同妃両陛下が行い、森林資源の保護と緑化運動の推進を目的に昭和五十二年から始まった。

支笏湖畔モラップ山麓における植樹祭を受けた第一回全国育樹祭は、植樹祭から数えて二六年後の昭和六十二年九月十三、十四日に開催された。植栽地は間伐の適期を迎えていた。開催テーマは道民から広く募集し「植えた夢 つないで育てて森づくり」とされた。

### 育樹祭開催のあゆみ

『第十一回全国育樹祭記念誌』参考

58年10月 林野庁及び国土緑化推進委員会（林野・緑推）に第11回全国育樹祭本道

開催協議

59年3月 緑推に育樹祭本道開催申請

8月 緑推理事会・育樹祭本道開催決定

60年5月 道林務部内に育樹祭連絡会議設置

7月 林野・緑推に開催計画等協議①（②60・12③61・1④62・5）

10月 林野現地調査

61年6月 緑推事前調査

7月 宮内庁、林野・緑推と行啓日程・開催計画等協議①（②61・12③62・3

④62・7）

11月 大会テーマ「植えた夢 つないで育てて森づくり」決定

62年5月 実行委総会開催

6月 宮内庁事前調査

7月 宮内庁へ行啓御執り成し書提出

8月 お手入れ行事及び式典リハーサル実施

9月13日 第11回全国育樹祭お手入れ行事開催（支笏湖モラップ）

14日 第11回全国育樹祭開催（野幌森林公園／参加者七〇〇〇人（うち中

央・道外二〇〇人）

**お手入れ行事** 皇太子同妃両陛下は育樹祭と北海道地方事情御視察のため、九月十三日午後零時十五分千歳空港着の全日空機で来道された。

両陛下はホテル日航千歳（現・グランテラス千歳）で昼食を終えられたのち、御料車日産プレジデントで支笏湖畔モラップ山麓に午後二時三十分過ぎに到着された。

後藤田正晴緑化推進連絡会議議長（内閣官房長官）、横路知事らの案内でお手植えの松に向かわれた。植栽地内御道筋となる歩道は簡易に舗装され、アカエゾマツは高さが九メートルほどに生育していた。

両陛下のお手入れは林業後継者の介添えで左右の枝を二本ずつ枝打ちされた。会場内では、千歳市桜木の特用林産物生産者久保田守ら林業後継者七人が梯子を使つての枝打ち実技を披露したほか、チェーンソーによる間伐作業、ハーベスタ（自走伐倒造材機）による立木伐倒、枝払い、玉切り、集材の一連作業をご覧になられた（説明役＝道林務部長）。その後、植樹祭記念碑をご覧になり、午後三時十分過ぎには小憩のため別邸に向かわれた。会場の参加者は百数十人ほどを数えた。

**千歳川林東公園** 別邸を午後四時近くに発たれた両陛下は御泊所京王プラザホテル札幌に向かわれる途次、千歳川に立ち寄られた。場所は支笏湖

公園自転車道が最も千歳川に接近する林東公園西側にある千歳川旧河道の内水循環水路の位置であった。

お立ち寄りの目的はこの年、花園の西越採卵場（現・千歳川捕獲場）捕魚車（ラインディアン水車）で捕えられたサケの一部を再放流し、蘭越のふ化場まで自然遡上させる試みが行われ、市街地川岸からサケが見られたからであった。魚類研究者として知られる皇太子殿下は妃殿下とともに偏光グラスを手に千歳川を遡上するサケの姿を楽しまれた。

十四日に野幌森林公園で行われた育樹祭式典では、千歳市東丘の若山長大が民有林振興の功績で北海道産業貢献賞（緑化功労）を受賞した。

両殿下は式典ご臨場の後、千歳空港からエア・ニッポン日本航空機製造YS-11で中標津空港を経由して根室に入られた。

十五日は根室、別海、浜中、厚岸の地方事情をご視察後釧路へ、十六日には釧路各所をご視察されたのち、釧路空港から全日空ボーイング767でご退道された。

後日、千歳市本庁舎市民ホールにおいて両殿下がお手入れで使われた鞘付きで握りのある小型の鋸と白手袋が、道林務部によって展示された。

### 植栽地と行政界

本論ではここまで、道林務部がいう植栽場所を示した支笏湖畔モラップ山麓、もしくは国有林苫小牧事業区314林班（七・九杉）・1002林班（一・三杉）（面積は各林班の一部）と記してきた。これは、支笏湖周辺が国土地理院地形図（地形図）が表示する行政界と土地所有者である北海道営林局（現・北海道森林管理局）林班図が表示する林班界Ⅱ行政界との差異があり、地名による記述が難しいからであった（千歳市は地形図が一般的に入手しやすく広く定着していること、更新に際しては関係市町村に

境界を照会し係争がないものについて行政界を表示していることなどから地形図の行政界を主張している）。

植栽地の行政界を地形図でみるとほぼ全域が千歳市域となるが、林班図によれば1002林班部分のみが千歳市域となる。

現在は自転車・歩行者専用道路となっている旧・国道276号は、樽前登山道やキャンプ場への取付道路、急カーブ、急勾配が連続していたため、自然植生への影響を考慮し道道樽前錦岡線の一部を通って山側を迂回するルートとして平成元年十月三日に切替えられた。ルート変更にもなうエピソードが『一般国道276号支笏国道工事誌』にコラムとして掲載されている。

一般国道276号モラップ改良工事に伴い道路管理境界を設定することになったが、千歳市と苫小牧が主張する市町村界にずれが生じていた（国土地理院地形図の市町村界と苫小牧営林署管内管理図林班界にずれがあった）。両市が主張する境界の中間点をもって暫定的境界とした。

両市の主張が折り合わず暫定境界を設定した理由は明確ではない。植樹

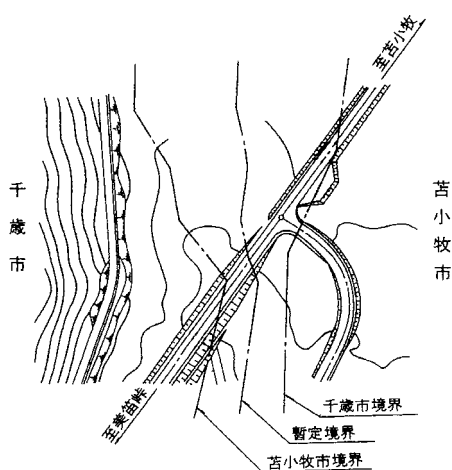


図3 管理境界平面図(『一般国道276号支笏国道工事誌』)  
千歳市境界を上部に延長すると図1「植樹祭会場見取図」の右側歩道入口付近となり、苫小牧市境界を延長すると写真3の植樹祭記念碑がある 分岐する道は道道樽前錦岡線

祭記念碑は314林班と1002林班の林班界（苦小牧市主張行政界）上に建立されていて暫定境界を設定しても碑の所在は千歳市域となっていた。いずれにしても植栽地が二市にまたがることから場を示した支笏湖畔モラップ山麓となったと考えられる。

植栽地をめぐる境界争いを概観した。そこで、植樹祭会場の地名について、どのように取り扱われてきたかを見てみたい（HPホームページ）。

①道林務部『北海道の名木美林』『モラップ記念林』：苦小牧市丸山 千才市モラップ

②北海道『第十一回全国育樹祭記念誌』：北海道支笏湖モラップ（千歳市 苦小牧市）

③北海道『第58回全国植樹祭基本方針』：支笏湖畔（モラップ地区）

④第58回全国植樹祭天皇陛下お言葉：第58回Ⅱ苦小牧市、第12回Ⅱ支笏湖畔のモラップ

⑤林野庁HP『全国植樹祭開催一覧』：北海道苦小牧市支笏湖畔

⑥林野庁HP『全国育樹祭開催一覧』：北海道苦小牧市道立自然公園

⑦北海道胆振総合振興局HP：モラップ部分林

①と⑦は道の同一部の取扱いであるが、⑦に市名掲出はなく地域と植栽地の性格から「モラップ部分林」としている。正しい地名取扱いの①「苦小牧市丸山 千歳市モラップ」を加筆できないものか。

②「北海道支笏湖モラップ（千歳市 苦小牧市）」③「支笏湖畔（モラップ地区）」④「支笏湖畔のモラップ」は「支笏湖畔モラップ山麓」と同義と思考するが、支笏湖とモラップは千歳市の地名である。

⑤「支笏湖畔」は地域名と考えたいが苦小牧市域に支笏湖畔はなく、⑥「道立自然公園」は道が分収林契約と管理していることからの錯誤か。

いずれにしても、苦小牧市のみを開催地としているのは片手落ちである

う。

⑤と⑥一覧の他開催地においては二つの自治体にまたがる開催の場合、市区町村名を併記していることから、千歳市として開催地名の是正を求めてもよいのではないだろうか。

## 第五八回全国植樹祭

第五八回全国植樹祭の会場は、日高自動車道苫東中央IC付近の苦小牧市静川苦小牧東部地域内の雑木林「つた森山林」隣接地にある。海側は昭和五十七年に石油備蓄を開始した北海道石油共同備蓄基地となる。全国植樹祭が工業地域で開催されたのは苦小牧が初めてとなった。

また、この地は昭和十八年に戦時統合によって国鉄千歳線・富内線となる北海道鉄道線が苗穂・千歳・沼ノ端・上鶴川（豊城）・辺富内（富内）を結んでいたが、沼ノ端から下り二つ目の駅が蔦森山林そばのニナルカであった（戦時統合・ニナルカ⇌静川（駅名改称）、沼ノ端・豊城間休止／現・国道235号／富内線⇌S61廃線）。

この地において平成十九年六月二十四日、「明日へ 未来へ 北の大地の森づくり」をテーマに北海道で二回目となる第五八回全国植樹祭が天皇皇后両陛下をお迎えして開催された。参加者は一人、広葉樹を主体に二万本を植樹し五つの新たな森を造った。この植樹祭の第二会場となったのが第一二回植樹祭植栽地のモラップ部分林である。

モラップ部分林との関連を中心に記述していきたい。

**台風18号** 平成十六年九月八日、支笏湖周辺は洞爺丸台風の再来といわれる台風18号の被害を受けた。道道支笏湖公園線、国道453号・276号沿いではトドマツやエゾマツの大径木のほか、シラカバの並木をなぎ倒し道路を塞いだことで支笏湖温泉は八時間以上も孤立、午前九時過ぎから

は停電となり復旧は翌朝となった。札幌では最大瞬間風速が五〇㍎を超え、道庁前庭や大通り公園、中島公園の巨木のほか、北大のポプラ並木が半数近く根こそぎ倒された。

支笏湖周辺では国有林の一割にあたる二七〇〇㍎が被害を受け、モーラップ部分林のアカエゾマツも五㍎所合わせて一㍎の被害を受けた。

**森林資源の循環** 森林資源の循環とは、森を「植えて、育てて、伐って木材として活用し、また植える」ということをさし、植樹祭のコンセプトのひとつにもなっている。

平成十六年八月、『千歳民報』の「夕刊時評」は、モーラップ部分林について「林野行政の弱体化から間伐、つる切りなどの手入れが行き届かず、豊かそうに見える緑のなかに枝が枯れていたり弱々しい木が多い。全国植樹祭を機に森づくりの機運と行動が広がればと強く願う」とした。

植えたままではなく「育てて伐って」の考えから、第五八回全国植樹祭の御野立所の建設用材はモーラップ部分林のアカエゾマツ間伐材とすることとなった。また、平成十六年台風18号で大量に発生した支笏湖周辺の人工林風倒木などは、式典参加者一万人が着座できるベンチ二七〇〇基に活用することとした。御野立所とベンチに間伐材と風倒木を積極的に利用することによって、森林資源の有効活用と大切さをアピールすることとなった。

全国植樹祭を「森林資源の循環」の面から考えると、多くの森林資源を原料とする王子製紙苫小牧工場、日本製紙北海道工場勇払事業所（元・国策パルプ）、王子ネピア苫小牧工場（旧・ホクシー）が操業する国内最大の紙パルプ産業都市である苫小牧の、自然豊かな苫小牧東部地域を植樹祭の会場としたことに意義を見出さなければならない。

**モーラップ部分林記念植樹** モーラップ部分林の平成十六年台風18号被

災部分についての補植が全国植樹祭に先立つ五月二十日、「モーラップ全国植樹祭の森 四十七年目の記念植樹」として実施された。

モーラップ部分林をさらに美しい森にしたいと作業に当たったのは、千歳、苫小牧の地元ボランティアや次代を担う少年少女ら四〇〇人ほどでミズナラ、イタヤカエデ、アオダモなどの広葉樹約一七〇〇本を植栽した。ミズナラを植えた「家具の森」、アオダモの「バットの森」、イタヤカエデの「楽器の森」のほか樹種によって彫刻の森、暮らしの森、薬用の森の六区画に分かれていた。植栽された幼木には、平成十七年初冬に部分林内から山取りされた五年生前後のミズナラ、イタヤカエデ、アオダモなど約八〇〇本が含まれた。

第一二回植樹祭とその後の歴史を知るにつれ、モーラップ部分林のアカエゾマツがいとおいしい。部分林のアカエゾマツはあと一五年ほどで伐期を迎えるが、北海道を代表する観光地にあることから皆伐分収ではなく植樹祭記念碑とともに公園化し、植樹祭記念の森として永く道民とともにあるよう継続して育林願いたい。部分林が荒廃した植樹祭記念碑と「植樹祭植栽跡地」の説明板だけとなつてはあまりにも口惜しい。

#### 引用・参考文献

千歳市『植樹祭関係』保存文書三冊（含・行幸啓資料） 昭和三十六年／『千歳市史』昭和四十四年／『増補千歳市史』昭和五十八年／新千歳市史機関誌『志古津』各号

北海道林務部『第十二回植樹行事並びに国土緑化大会実施概要書』 昭和三十六年／『北海道の名木美林』昭和四十三年

北海道『行幸啓概要（図面関係）』 昭和三十六年／『行幸啓御日程次第書（付・

モーラップ御植栽地散策分』 昭和四十三年／『第十回全国育樹祭記念誌』 昭和六十二年

地蔵慶護『武四郎のタルマイ越え』 みやま書房 平成三年

苦小牧民報社『森と私たち』 取材班『森と私たち』 平成十八年

札幌開発建設部札幌道路事務所『一般国道276号支笏国道工事誌』(社) 北海道開発

発技術センター 平成三年

よみがえった森林記念事業実行委員会編集『森林復興の軌跡』 平成七年

水井憲雄『最近発生した林木の霜害について』『光珠内年報』昭和47年度No.15 林

業試験場 昭和四十八年

林野庁札幌管区局『風害8000万石・北海道森林風害記録写真集』札幌林野共

済会 昭和三十二年

自然公園美化管理財団『支笏洞爺国立公園支笏湖』 昭和六十三年

竹馬敏廣『樽前山』苦小牧郷土文化研究会 昭和五十四年

苦小牧市『苦小牧市史 下巻』昭和五十一年

『林班図』苦小牧管区署・胆振東部森林管理署

北海道新聞社『天皇皇后両陛下ご来道記念 植樹祭グラフ』 昭和三十六年

長見義三『ちとせ地名散歩』北海道新聞社 昭和五十一年

『千歳民報』／『北海道新聞』／『読売新聞』／『千歳毎日新聞』

## 協力

北海道胆振総合振興局森林室(苦小牧)

先田次雄(自然公園財団支笏湖支部)

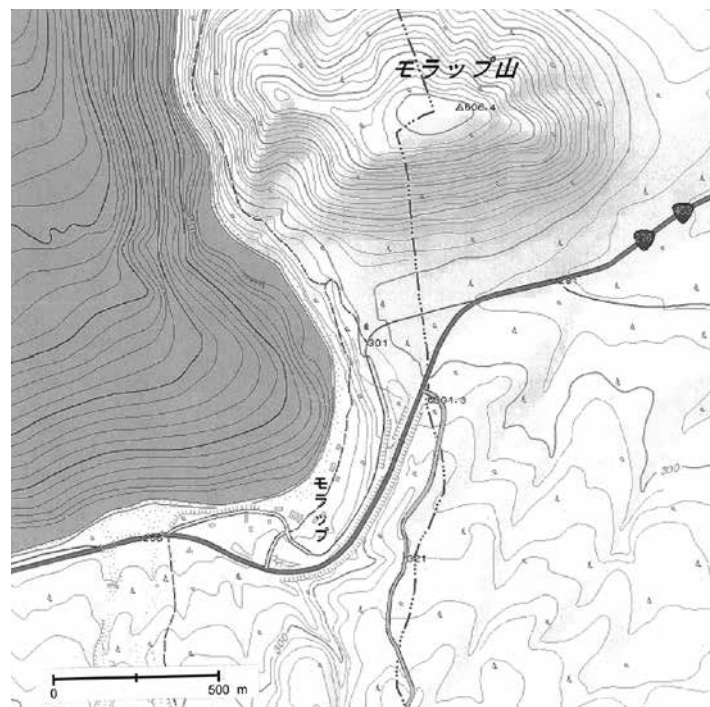


図4 『地理院地図(電子国土Web)』にみるモラップ部分林周辺  
新旧の国道276号の位置関係がよく判る。旧道の急カーブ地点に植樹祭記念碑の地図記号があり、この上を林班図の行政界が走る(図1参照)。ビスンモラップ山頂付近・モラップ部分林を抜け、道道樽前錦岡線に沿って走る線は地理院地図行政界である。

# なぜ今、『支笏湖歴史年表』か

先 田 次 雄

自然公園財団支笏湖支部職員

支笏湖ビジターセンターで働くようになってからお客様に「それ、いつもの出来事ですか？」などと、聞かれることが予想以上に多かった。話の流れから、何気ない質問だということは分かっているが、やはりきちんと答えるのが仕事。記憶をたどり、資料をあさってお答えするが、そのようなときに限って肝心な資料がなかなか見つからない。電話での問い合わせならばお時間をいただくことも可能だが、面と向かって話をしているお客様を二〇分も二〇分も待たせるわけにはいかない。

持ち時間は、インスタントラーメンではないが、せいぜい三分。どうしても正確な、自信のない答えになりがちだが、いつも気になっていた。お客様が帰った後に調べ直すことが多いが、同じ事象でも資料によって特に年月日が異なるケースが案外多いことに気が付いた。

せめて年月日だけでもきちんとしてほしい。支笏湖との付き合いが長く、支笏湖関係の資料をたくさん溜めこんでいたこともあって、独自の年表をまとめてやろうと思いついたのが平成二十五年度の春だった。

軽い気持ちで始めたが、一カ月間で「とんでもないことに首を突っ込んだ」と思い始めた。多種多様な資料があるが、記載内容が若干だがずれているケースが予想以上に多く、いったいどれを「信用できるか」が分からなくなってきたのだ。資料上の年月日が違っていても「〇〇が起きた」「〇〇をつくった」などの出来事だけは同じなので、その一つひとつについて検証をしなければならない、とあきらめがつくまで数か月間かかってし

まった。

あきらめと、開き直りの中で方向性が固まると、あとは各項目について、できるだけ引用ではなく原文に近い資料を調べていった。複数の資料で一致すれば正解。

最も役立ったのは行政資料と新聞記事の日付、続いて社史など関係者が直接まとめた資料、論文などの学術資料。最も危ないのは引用先がはっきりしないインターネット上の情報だった。ただし、自分で資料収集と分析を行っている一部のホームページには、その努力に脱帽、いや尊敬の念すら抱いた。

結論のでないことも多かった。

例えば、支笏湖の全面結氷。近年の平成十三（二〇〇一）年、昭和五十三（一九七八）年、昭和二十八（一九五三）年については写真が残されているが、それ以前については『北海道水産試験場千歳支場支笏湖孵化場日誌（孵化場日誌）』『2001年、支笏湖と洞爺湖は凍った理由』Ⅱ魚と水2002年Ⅱと地元支笏湖の郷土史研究家高橋長助の『あなたをまつ支笏湖』が記述している。

『孵化場日誌』では大正二（一九一三）年全面結氷の記載があるだけだが、『あなたをまつ支笏湖』では明治四十三（一九一〇）年、大正三（一九一四）年、昭和十九（一九四四）年、昭和二十年の四回全面結氷したことになる。

支笏湖地区開発に大きな足跡を残した王子製紙の千歳川水力発電所の建設時期については、関連資料として『王子製紙苫小牧工場創業一〇〇年のあゆみ（一〇〇年のあゆみ）』、『増補千歳市史（増補）』、『苫小牧市史』などを見た。

その中で最初に建設された第1水力発電所については、『一〇〇年のあ

ゆみ』では第一堰堤・水溜竣工が明治四十二（一九〇九）年十一月十日、送電開始が四十三年七月十二日。『苦小牧市史』では四十二年九月十一日竣工、『増補』では四十三年九月竣工。水溜の同発電所展望台に設けられた案内看板には建設年月日が四十三年五月二十八日と記載されていた。

ちなみに苦小牧工場の操業開始は明治四十三年九月で共通していた。余談になるが、『一〇〇年のあゆみ』によると、苦小牧工場について四十二年十二月二日仕上室屋上で上棟式、同月二十七日建物工事完成で請負業者から引き渡し、四十三年九月操業開始、四十四年五月十八日開業式挙行とあるが、同書概略年表の四十四年五月十八日の欄では「苦小牧工場開業式に代え、記念祝宴。室蘭『常磐楼』、札幌『幾代』で催す」となっている。記念祝宴は開かれたが、開業式は実際に行われたのかどうかは読み取れなかった。また、同工場には開業記念日があり、皇太子（後の大正天皇）が同工場を視察した四十四年九月十二日を開業記念日としている。支笏湖温泉地区の「集団施設地区」指定日についても困ったし、困っている。

国立公園の集団施設地区は「国立・国定公園の利用拠点に宿舎、野営場、園地などを総合的に整備する地区として、公園計画に基づき環境大臣が指定する地区」で、簡単にいえば国立・国定公園内でホテルや商店などを建設、営業できる場所のこと。環境省支笏湖自然保護官事務所によると、支笏湖地区では昭和二十七（一九五二）年十月十三日に一般計画、三十二（一九五七）年十月一日に区域指定が行われたとしているが、厚生省（当時国立公園を所管）の初代国立公園管理員（現・自然保護官）の自伝では二十九年四月十九日となっている。支笏湖関連の年表などでも二十九年としているものが多い。

結局、現時点で分からないことは分からないままとして複数の年代を記載

したり、不確定とした。とにかく面倒で頭の痛い作業の連続だったが、昨年三月に第一版の『支笏湖歴史年表2014』を公開することができた。

ところで、年表作成の言いだしっぺは自分だが、千歳市史編集委員会の守屋憲治専門部員の全面的な協力がなければ一応の完成をみなかったし、今回本誌で公表する改訂版『支笏湖歴史年表2015』も目の目をみなかっただろう。同時に、第一版ではかなり一生懸命に点検したはずだったが、多くの方々から誤字、脱字、名称違いなどの指摘、さらに新たな事実などをご助言、ご連絡いただき、今回に生かすことができた。この場を借りて感謝するとともに、より正確なものにするためにこれからもご協力をお願いしたい。（敬称略）

追記：『支笏湖歴史年表2015』は三月中旬に支笏湖ビジターセンターホームページでも公開する予定になっている。

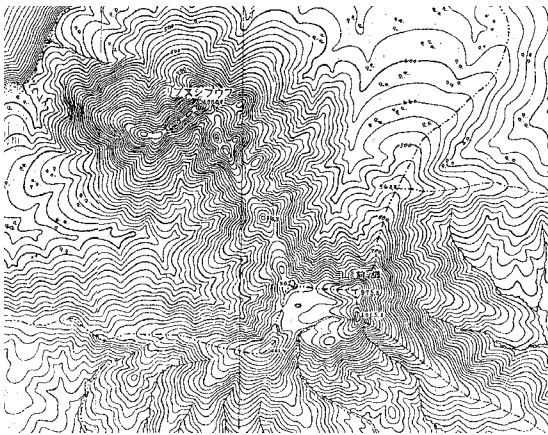


図1 陸地測量部 明治二十九年製版 5万分1「樽前山」一部  
現在の溶岩円頂丘（溶岩ドーム）が形成させる前の樽前山地図  
「古期溶岩ドーム」として記録されている最初の溶岩円頂丘は慶応3（1867）年の噴火で誕生 7年後の明治7（1874）年の噴火で崩壊した  
現在の溶岩円頂丘が誕生したのは35年後の明治42（1909）年の噴火で、地図には古期溶岩ドームの崩壊、飛散で形成された火口原や噴火口と思われる凹地が読み取れる

支笏湖歴史年表2015 (『志古津』版)

凡 例

- ・この年表にはそれらの時代背景を知るうえで必要な出来事も併せて記載した。
- ・同年中の事項は日付順に、不明なものは「この年」、「この年の」、「この頃」として記載した。月の未確定なものは「秋」などと表記した。
- ・読みにくい地名・人名にはルビをつけた。
- ・アイヌ語を起源とする地名であっても現・字名は漢字表記とした。
- ・正式名称が多く文字数を要する場合、初出に(略称)を付し、後は略称とした。
- ・不確定な事項については末尾に「※」を付した。
- ・用語は一部、当時の呼称を用いている。
- ・出来事の作成にあたっては千歳管内を中心に記載し、『千歳市史』、『増補千歳市史』、『新千歳市史』、新千歳市史機関誌『志古津』各号、『千歳民報』、『北海道新聞』を主な典拠とし、そのほかの文献・資料によって補った。
- ・北海道庁Ⅱ昭和22年(1947)地方自治法施行までは内務省直轄の地方行政官庁\*モーラップⅡ千歳市の字名「モラップ」の通称

年 表

- 正保元年(1644)
- 秋 松前氏広、幕府呈上『正保御国絵図』に「シコツ越え」を描く
- 万治元年(1658)
- この年 地名「志古津」初出(『福山秘府』中「志古津弁財天小社建立」の記録)
- 寛文6年(1666)
- この年 僧円空、志古津弁天堂に自作仏像奉納

寛文7年(1667)

8月6日 樽前山最大規模噴火、火砕流山麓に達し噴煙は成層圏、降灰は苦小牧で1〜2m、十勝、道東方面降灰

享保9年(1724)

7月 前年、西蝦夷地サケ不漁、東蝦夷地シコツでもアイヌに餓死者でる、

松前藩、幕府に報告

元文4年(1739)

7月14〜26日 樽前山大噴火、火砕流山麓に達し山頂にカルデラ形成、降灰は苦小牧で50〜80cm

宝暦13年(1763)

6月 飛騨屋久兵衛(蝦夷檜材業)手代、支笏湖で怪獣に出会う

享和2年(1802)

2月 幕府「蝦夷地之奉行(5月改称・箱館奉行)」新設、羽太正親・戸川やすのぶ安論を任命

文化2年(1805)

この年 箱館奉行羽太正親、「シコツ」を「千歳」と命名

文化9年(1812)

この年 狩野派画家谷文晁『日本名山図譜』発行、谷元旦画とされる樽前山を掲載(樽前山図画初出)

文化年間(1804〜1817)

樽前山中噴火、外輪山・中央火口丘形成

安政4年(1857)

7月 松浦武四郎、千歳(支笏湖)周辺踏査(5回目の蝦夷地踏査)

この年 荒井金助・村垣淡路守、石狩〜千歳間道路開削

慶応3年(1867)

初秋 樽前山中噴火、古期溶岩ドーム形成

慶応4（明治元）年（1868）

7月 仙台藩白老元陣屋藩士が陣屋放棄（仙台藩降伏・追討軍白老進軍情報）・美笛のシラッチセに潜伏後、小樽からの船で帰国

9月8日 明治と改元、一世二元の制を定める

明治2年（1869）

8月15日 千歳・長都・漁・島松・蘭越・烏柵舞6村↓胆振国千歳郡編成（蝦夷地を北海道と改称し11国86郡を置く）

8月20日 千歳郡、高知藩支配

明治4年（1871）

4月 勇払郡開拓使出張所開庁（千歳を管轄する初の行政機関）

8月20日 千歳郡の高知藩支配免除し、開拓使直轄（引渡M5・5・1）

12月25日 樽前山噴火、古期（前存）溶岩円頂丘崩壊し約100mの凹地となる

明治5年（1872）

5月 開拓使千歳出張所開庁（千歳管内初設置の行政機関）

12月25日 樽前山大噴火

この年 幌美内「太平山」碑（恵庭岳硫黄採掘安全祈願・秋田市広面赤沼三吉神社分身）佐竹義理建立

明治6年（1873）

12月 室蘭街道（現・国道36号）開通（工事請負Ⅱ伊藤一隆の父・平野弥

十郎）

この年 開拓使千歳駅通所開設

明治7年（1874）

2月8日 樽前山中噴火、古期溶岩円頂丘破壊

2月16日 樽前山噴火、札幌方面降灰

4月28日 開拓使千歳出張所廃止し勇払出張所所管（以後、千歳郡の所管ⅡM8

勇払出張所廃止し本庁民事局所管勇払詰所、9民事局所管廃止し勇払詰所を勇払分署、10勇払分署廃止し本庁所管、12郡区町村編成法・大区廃止し郡区町村編成、13勇払五郡役所開庁）

明治10年（1877）

この頃 支笏湖街道（沼街道）開削（マチ、藤の沢経由）

明治11年（1878）

9月3日 英旅行家イザベラ・バード、北日本踏査中に見聞した樽前山を『日本の未踏の地（1911刊）』に記述：樽前山欧州初紹介

11月13日 官営美々鹿肉缶詰所開設（M13休業、M17・6廃止）

明治12年（1879）

この年 塩谷栄作が漁に來住し旅宿経営（屋号（駒））、後に幌美内で温泉宿（屋号（駒））を営む

明治13年（1880）

3月1日 千歳外五カ村戸長役場開庁（千歳開庁記念日）

8月 千歳地方バツタ被害（十勝国バツタ大発生飛來）

明治14年（1881）

1月 開拓使札幌本庁地理課森林派出所設置、樽前官林管轄

8〜9月 明治天皇北海道御巡幸

9月2日 明治天皇、千歳に行幸し千歳行在所ご宿泊（新保旅館）

明治16年（1883）

10月7日 樽前山噴火（10・18、11・15にも噴火）

明治18年（1885）

1月4日 樽前山噴火（3・26にも噴火）

明治19年（1886）

1月26日 北海道庁設置（3月開庁）  
 4月13日 樽前山噴火（4・15、16、28にも噴火）  
 明治20年（1887）  
 9月3日 樽前山噴火（10・7、8にも噴火）  
 明治21年（1888）  
 11月 国費で千歳鮭魚人工<sup>ふかじょう</sup>字化場開設（北海道庁水産課技師伊藤一隆）  
 明治22年（1889）  
 この年 支笏湖・樽前山一帯国有林が御料林編入  
 明治27年（1894）  
 2月8日 樽前山噴火（8・17にも噴火）  
 12月 阿寒湖カバチエツポ（後・姫<sup>ヒメマス</sup>鱒）卵支笏湖移植、支笏湖孵化場、仮小屋建築（M30）  
 明治28年（1895）  
 4月 カバチエツポ孵化稚魚初放流（12万尾）  
 明治29年（1896）  
 6月 津田震一郎、丸山にマッチ小函素地製造「北海工場」創業（材Ⅱエゾマツ／M38・1廃業）  
 11月9日 捕魚車（後・通称インディアン水車）始動（M12・12）  
 明治30年（1897）  
 10月23日 カバチエツポ初回帰確認  
 この年 樽前山一等三角点石柱埋設（東ピーク）  
 明治31年（1898）  
 この年 千歳鮭魚人工字化場支笏湖字化場開設（※）  
 明治33年（1900）  
 この年 カバチエツポ卵亀田郡漁業組合へ分与（初）

明治35年（1902）  
 12月 カバチエツポ卵十和田湖及び大沼へ分与  
 この年 木材搬出本格化、筏湖上輸送開始／札幌・坂本木材が建設材として千歳川流送（ネッソウ／ポロソウⅡ木製軌道）  
 明治36年（1903）  
 この年 カバチエツポ卵田沢湖（道外初）及び大沼へ分与  
 明治37年（1904）  
 9、10月 王子製紙専務鈴木梅太郎一行、千歳川・支笏湖周辺調査  
 この年 初造林（クロエゾマツ山引苗3・66ha／モラップ部分林東隣地315林班／御料局札幌支庁苫小牧出張所）…M36説あり  
 明治39年（1906）  
 4月7日 王子製紙千歳川水利権取得  
 この月 王子製紙土地買収開始  
 9月22日 御料局札幌支庁、王子製紙に林木払下げ契約（M40）八万尺／年、10年契約するも1年で中止  
 10月 王子製紙臨時株主総会で苫小牧工場新設正式決定  
 明治40年（1907）  
 9月 支笏湖請願巡查駐在所開設（請願Ⅱ王子、明治末期廃止）  
 10月26日 王子製紙苫小牧工場専用鉄道（山線・王子軽便鉄道／軌間762mm）敷設工事認可  
 この年 王子製紙苫小牧工場及び発電所建設材として湖畔・紋別・幌<sup>オコタン</sup>美内・奥<sup>シヤモナイ</sup>澤・支寒内から伐出開始  
 明治41年（1908）  
 1月 山線機関車2両三井物産合弁発注（米ポーター社9月製造）  
 5月 王子製紙苫小牧工場建設着工

|                  |                                                |                                                                           |
|------------------|------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------|
| この頃              | 千歳川河口に木製線路橋完成                                  | 全道から2000匹                                                                 |
| 7月15日            | 王子製紙千歳川ネッソウ仮発電所落成                              | 12月 佐々木初太郎、丸駒温泉旅館開業                                                       |
| 8月12日            | 山線運行開始                                         | 大正5年(1916)                                                                |
| 12月26日           | 北海道庁水産課技師森脇幾茂、カバチエツポの「姫鱒」命名提案                  | 3月 王子製紙第2発電所完成                                                            |
| この年              | 支笏湖孵化場改築                                       | 8月 田中阿歌麿、田中館秀三、小久保清治の三理學博士が湖深度、周辺地質、火山調査実施。支笏湖最深度はルーカス式深測器で363m           |
| 明治42年(1909)      |                                                | この年 王子製紙苦小牧工場倶楽部別邸完成(王子別邸/総檜造)                                            |
| 1月6日             | カバチエツポの「姫鱒」命名決定                                | 大正6年(1917)                                                                |
| 4月17、19日         | 樽前山大噴火、溶岩円頂丘噴出(1・11、3・30、4・12、5・15にも噴火)        | 12月 王子製紙、烏柵舞に私立王子尋常小学校設置(特別教授所廃止)                                         |
| 明治43年(1910)      |                                                | この年 樽前山噴火(4・30、5・12にも噴火)以後、小噴火約20年継続樽前山標高1024m(東ピーク)決定                    |
| 7月12日            | 王子製紙千歳川第1水力発電所(第1発電所/水溜)送電開始                   | 大正7年(1918)                                                                |
| 9月               | 王子製紙苦小牧工場操業                                    | 5月10日 王子製紙第3発電所完成                                                         |
| この年              | 姫鱒卵洞爺湖他9カ所へ分与                                  | 6月13日 樽前山噴火                                                               |
| 明治45(大正元)年(1912) |                                                | 8月25日 王子別邸初御泊所となる(閑院宮同妃若宮殿下、戦前・戦中皇族ご宿泊19回)                                |
| 10月              | 水溜に千歳村烏柵舞特別教授所設置(後・水明小学校)                      | この年 夕振、標高321m地点を「丸山遠見」と命名、簡易な櫓建設                                          |
| 9月12日            | 皇太子殿下(後・大正天皇)王子製紙苦小牧工場ご視察、この日をもって苦小牧工場操業記念日とする | 大正8年(1919)                                                                |
| 大正2年(1913)       |                                                | 2月 烏柵舞地区住民38人苦小牧町への編入請願書提出(千歳村・大正12年に水明墓地の設定、冬期間水明児童館、千歳村休泊所(後・北大生寮)設置約束) |
| 大正3年(1914)       | 南7条林道開削(S44改線↓第1縦断林道)                          | 5月4日 樽前山噴火                                                                |
| この年              | 筏曳航船千歳丸(5t)運航                                  | 11月 王子製紙第4発電所完成                                                           |
| 大正4年(1915)       |                                                | この年 支笏湖へ長都沼からカワエビ移植(スジエビ6升)                                               |
| 4月20日            | 千歳、長都、蘭越、烏柵舞4村合併 千歳村2級町村制施行                    | 大正9年(1920)                                                                |
| 11月              | 大正天皇即位大礼に際し、支笏湖ザリガニ2000匹献上(NHKⅡ                |                                                                           |

7月22日 樽前山噴火

この年 村道烏柵舞街道開削（千歳）王子製紙第4発電所）

北海道水産試験場（道水試）千歳支場から虹鱒移植（10万2000尾）

大正10年（1921）

7月6日 樽前山噴火

10月 支笏湖巡查駐在所開設（水溜）

この年 道水試千歳支場から虹鱒稚魚移植（7万2000尾）

北海道庁、天然記念物候補地として支笏湖周辺調査

大正11年（1922）

4月1日 山線、一般乗客受入

7月 摂政宮（後・昭和天皇）支笏湖行啓、山線貴賓車（苫小牧王子アカシ

ア公園静態保存）運行、王子別邸小憩

この年 支笏湖保勝会設立（姫鱒保護育成、捕獲開始（中村組（現・菱中）漁業部）、S1捕獲事業官営に戻す・保勝会S7解散活動実態不詳）

大正12年（1923）

2月21日 樽前山噴火（6・17、29、7・13、14にも噴火）

4月 王子尋常小学校が王子尋常高等小学校になる

この年 筏曳船舶みどり丸（12t）運航

関東大震災復興材として支笏湖周辺から正角7万石緊急伐出

大正13年（1924）

6月 千歳村全村を国立公園にとの請願書提出

この年 丸山苗畑開設（苫小牧営林署管内最古／北海工場跡地25×50m带状林間苗畑）

山線千歳川河口にトラス鉄橋架橋（支笏湖鉄橋／函館本線砂川～滝川

間第1空知川橋梁（北海道官設鉄道M32英製）払下げ）…現・山線鉄橋＝現役鉄橋道内最古

「支笏湖」を「千歳湖」に改名する上申書提出

大正14年（1925）

この年 谷本亀、支笏湖初動力遊覧船運航

姫鱒全滅の危機＝乱獲＋プランクトン減少＝美笹、オコタン、ニナルストマナイ川に過燐酸を大量に堆積させ自然流出＝ザリガニ、カワガニ全滅（ザリガニ消滅はS3頃説あり）

長都沼からフナ成魚移植（100尾）

択捉郡（島）留別村得茂別湖（ウルモベツ／5・8km）から姫鱒卵移植（翌年にかけて／卵10万粒、放流9万尾）

大正15（昭和元）年（1926）

10月19日 樽前山噴火（24、26、30日にも噴火）

小樽新聞社機、樽前噴火空中取材（酒井憲次郎操縦「北海」1号機）

10月22日 酒井憲次郎操縦「北海」1号機千歳着陸場着陸

10月以降 阿寒湖からマリモ支笏湖移植

ウルモベツから紅鮭卵80万粒移植（S2、3、7、8、10、11、12、14、15にも移植）

道水試千歳支場から虹鱒稚魚移植（2万尾）

昭和2年（1927）

6月 支笏湖郵便取扱所開設（水溜）

この年 樽前山神社奥宮建立（樽前山頂／木造／S29洞爺丸台風で崩壊）

昭和3年（1928）

9月 樽前山噴火（9・6、10・25にも噴火）

この年 洞爺湖産姫鱒卵移植（10万粒）

支笏湖姫鱒孵化場改築（H26解体）

昭和4年（1929）

この年 道千歳鮭鱒孵化場から白鱒幼魚移植（392尾）

昭和6年（1931）

この年 道千歳鮭鱒孵化場から河鱒稚魚移植（18万4280尾）

昭和7年（1932）

この年 支笏湖保勝会活動再開（観光地化に伴う保護活動目的）

阿寒湖産姫鱒卵移植（20万粒）

昭和8年（1933）

5月 大野真澄、美笛モシルンピパイ上流で金鉦露頭発見

8月22日 烏柵舞道路開通式（千歳く支笏湖）

12月1日 樽前山噴火

昭和9年（1934）

4月2日 山線終点・上<sup>かみろとせ</sup>千歳く市街地間延長を王子製紙に請願（千歳村）

10月28日 千歳飛行場完成

この年 山線冬期間運行（11月下旬く5月上旬）

湖岸石垣防波堤完成（山線鉄橋く孵化場間）

大野真澄、金鉦を中島商事に売却

昭和10年（1935）

6月 山線4号機関車製造（小樽橋本鉄工所）

9月 中島商事、金採掘開始

10月 千歳鉱業所坑外専用軌道敷設（軌間762mm中村組敷設／加藤製作所

ガソリン機関車5両配置）

この年 帝室林野局、木材直営生産開始

谷本商店三〇通船部遊覧船第1・第2観光丸運航

千歳く中モラップ間道路完成

昭和11年（1936）

9月 支笏湖郵便局開局（無集配3等局、水溜郵便取扱所廃止）

10月1日 中島商事、千歳鉦山（株）設立 金採掘本格化（元山）

この頃 千歳鉦山請願巡查駐在所開設（S13く18千歳鉦山巡查部長派出所）

11月15日 樽前山噴火（11・25にも噴火）

この年 北海道漁業取締規則解禁区設定、姫鱒釣りⅡ6く9月

翠明閣（大正初期建Ⅱ王子製紙山林部宿舍）、中村組受託経営

千歳自動車合資会社、千歳く中モラップ間バス運行

昭和12年（1937）

2月15日 烏柵舞尋常高等小学校千歳鉦山特別教授場開校（美笛倶楽部2階）

3月27日 千歳鉦山専用線、国鉄苫小牧駅構内敷設（山線く国鉄積替用）

10月15日 千歳鉦山尋常小学校開校

12月2日 千歳鉦山尋常高等小学校開校

この月 支笏湖郵便局電話取扱開始（集配3等局昇格）

この年 洞爺湖産姫鱒卵移植（50万粒）

北海道鉄道バス、千歳駅く支笏湖（現・休暇村人口付近）間運行

山線交換駅・六<sup>マイレ</sup>哩駅（高丘）新設

昭和13年（1938）

2月7日 美笛郵便局開局（無集配3等局）

9月7日 日独青年交換会でヒットラーユーゲント、モラップ野営

9月28日 村道支笏湖街道、地方費道（Ⅱ県道）昇格し千歳支笏湖線となる

11月 支笏湖郵便局新築移転（翠明閣横）

この年 日本鉱業恵庭鉱業所開坑（恵庭岳西北）

支笏湖姫鱒保護協力会設立（支笏湖保勝会改組）

三〇通船部遊覧船連航中止（支那事変↓燃料不足）

千歳鉱山福神坑開発

昭和14年（1939）

11月1日 千歳海軍航空隊開庁

12月 千歳鉱山青化製錬所完成（250t／日）

この頃 千歳鉱山人口5000人超（戸数約600）

この年 千歳鉱山警防団創設（S22・4廃止）

昭和15年（1940）

4月 美笛地区に植樹用苗畑開設

7月 美笛郵便局局舎新築移転

昭和16年（1941）

2月6日 王子製紙第5発電所完成

3月1日 国民学校制移行

12月8日 陸軍、英領マレー敵前上陸、海軍、ハワイ海戦（WWII参戦）

この年 丸山神社遷座（丸山中腹T2建立↓丸山集落）

昭和17年（1942）

1月21日 美笛郵便局電信電話取扱開始

2月 千歳鉱山、蒸気機関車2両新造（日本機械車輛、米ガソリン禁輸）

3月1日 千歳鉱山募集朝鮮人（331人中34人）食料増配要求の紛争発生

5月1日 千歳町制施行

秋 丸山遠見望楼建設（木造2階建・2階部分総ガラス張り、戦争末期防空監視所）

12月 千歳鉱山坑外軌道に芦別森林鉄道バグナル17号機ベアトリス入線

御料林産材輸送（S18・4）

この年 千歳鉱山坑内軌道改軌（ニチユ蓄電池機関車・508mm↓500mm）

昭和18年（1943）

4月1日 金鉱業務整備令実施、千歳鉱山・恵庭鉱山休山（保坑）

8月30日 支笏湖巡查駐在所、水溜↓支笏湖畔移転（告示のみ、S20移転）

この年 プロペラ材としてマカバ大量伐採（紋別岳東斜面／陸軍駐屯）

昭和19年（1944）

1月1日 苫小牧町、字名「丸山」新設、山線十三哩駅改称↓丸山駅

7月2日 樽前山噴火

昭和20年（1945）

7月14日 北海道空襲米艦載機カーチスSB2Cヘルダイバー艦爆、樽前山南東

斜面7台目付近墜落、搭乗員3人死亡・1人6日間山麓潜伏

8月15日 敗戦、海軍第2滑走路（連山滑走路）完成

10月5日 連合国軍（米軍）小樽上陸、千歳飛行場占領

この月 支笏湖巡查駐在所移転

11月12日 連合国軍最高司令官総司令部、国立公園等の保護保全を指令

昭和21年（1946）

3月 仮称「道南」国立公園指定促進期成会設立（5月説あり）

この年 第1発電所上流千歳川に木橋架設（人道橋／現・翠明橋）

高橋長介、釣り船13隻新造、戦後初の貸船業開始

昭和22年（1947）

4月1日 御料林、農林省に移管し国有林

この月 札幌土木現業所千歳出張所開設

5月 恵庭営林署千歳・烏柵舞・紋別担当区事務所開設

9月20日 支笏湖巡查駐在所、苫小牧警察署から札幌警察署管内移管

9月23日 町役場湖畔支所設置（管轄〓烏柵舞全域／S22北大寮借上、23中村組

配給所倉庫借上、24現・商店街中央、32現・駐在所横（建設中〓ユ一

スホステル借上）、61支笏湖市民センター）

12月25日 烏柵舞小学校支笏湖季節分教場を北大寮内に設置

この月 支笏湖周辺苦小牧編入問題再燃

この年 現・翠明橋、自動車通行可能となる

昭和23年（1948）

1月20日 烏柵舞小学校支笏湖季節分教場授業開始

4月1日 苦小牧市制施行

6月 米国立公園局チャールス・リッチー、国立公園指定調査実施

7月 北海道中央バス（中央バス）、札幌～千歳～支笏湖間運行

10月15日 支笏湖姫鱒孵化事業協力会設立

この年の 貸船・遊覧船業者／支笏湖畔Ⅱ小村開三、小野寺寿、貫田剛吉、菱中

通船部、山森三郎、加藤喜久、岡部六郎、八木勝男、佐々木広見、モ

ラップⅡ山田金次郎

昭和24年（1948）

1月 烏柵舞小学校支笏湖季節分教場独立し支笏湖小学校開校

2月18日 苦小牧市立苦小牧東小学校丸山分校開校（営林署車庫改造）

3月24日 支笏湖観光設立、発起人苦小牧8人・千歳21人、資本金300万

この月 樽前山神社、樽前山頂奥宮敷地88㎡を国から購入

4月 烏柵舞小学校に千歳中学校烏柵舞分校併置

5月16日 支笏洞爺国立公園指定

5月24日 千歳観光協会（現・千歳観光連盟）設立、当時支笏湖観光協会（元・

支笏湖姫鱒孵化事業協力会）と並立

7月26日 支笏洞爺国立公園指定記念式典（於・札幌市内）

8月1日 支笏湖観光ホテル開業

この月 道宮モーラップ野営場開設

9月 『観光の千歳』（千歳初観光パンフレット）発行

この年 商店地区に支所建設事務開始

米軍イチャンコッペ山頂レーダー基地着工（朝鮮戦争勃発で中止）

昭和25年（1950）

2月18～19日 第1回さっぽろ雪まつり

3月 支笏湖郵便局電話交換業務開始

4月 千歳鉦山中学校開校

山線、丸山～第4発電所間バス移行

8月24日 苦小牧市道支笏湖産業道路（苦小牧～支笏湖／現・国道276号）竣工

8月25日 苦小牧市営バス、支笏湖線運行（4往復／日）

9月23日 支笏湖畔で苦小牧歌謡発表会開催、「千歳音頭」千歳管内初披露

この年 千歳鉦山、三菱傘下（現・三菱マテリアル）となりフレナイ坑開発

千歳鉦山舳曳航用白銀丸（鋼船19t）進水

昭和26年（1951）

1月29日 樽前山噴火（7・28にも噴火）

4月1日 苦小牧市立苦小牧東小学校丸山分校分離独立し丸山小学校開校

5月1日 字名改正、内別から千歳鉦山までの烏柵舞番外地↓湖畔地区を「湖

畔」、鉦山地区を「美笛」、発電所地区を「水明郷」など。（旧・

烏柵舞367世帯2036人）紋別24世帯104人、水明郷65世帯

303人、藤の沢17世帯72人、湖畔68世帯357人、モラップ13世帯

39人、幌美内4世帯14人、美笛176世帯1147人、西森・支寒

内・奥潭Ⅱ0

5月10日 山線廃止（全線、王子専用バス運行）

この月 町役場美笛支所設置

6月 中央バス、札幌～千歳～支笏湖間運行

|             |                                                                                                                                               |                                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 7月          | 開発建設部千歳出張所開設                                                                                                                                  | 千歳交通（千歳ハイヤー）支笏湖営業所開設                                                                                                                                                                                                                |
| この年         | 苦小牧営林署入潤（防波堤付簡易船舶繫留施設）完成<br>北海道漁業調整規則施行釣り期間（6～8月）、解禁区域（美笛追加）指定<br>地蔵尊（水難供養）地元有志建立（S46※現在地移設）                                                  | 4月18日 支笏湖集団施設地区指定（自然保護官事務所資料S32・10・1）<br>5月2日 樽前山噴火（11・19にも噴火）<br>9月26日 洞爺丸台風（15号台風）により支笏湖樽前山一帯森林大被害／丸山遠見望楼被害のため改築                                                                                                                  |
| 昭和27年（1952） | 7月 千歳鉱山、坑外軌道撤去し鉱石輸送をトラックに切替<br>8月 モラップに苦小牧市営樽前荘建設<br>10月13日 支笏湖集団施設地区・一般計画樹立（※）<br>この年 ヒメマス解禁期間6～8月                                           | この年 湖畔市街地地区、農林省から厚生省に移管                                                                                                                                                                                                             |
| 昭和28年（1953） | 5～7月 姫鱒孵化事業協力会施肥実施（二ナル川もしくは美笛川に硫安・過燐酸石灰）<br>6月19日 厚生省、支笏湖にレンジャー配置<br>6月26日 第1回支笏湖水まつり開催（S26説あり）<br>この頃 米軍支笏湖水上訓練場設置（モラップ一の沢、FAC・1057・通称レクエリア） | 昭和30年（1955）<br>2月14日 樽前山噴火<br>7月 支笏湖ユースホステル開業（日本ユースホステル協会直営第1号／旧・支笏湖小学校校舎）<br>この年 支笏湖グランドホテル本館建設                                                                                                                                    |
| 昭和29年（1954） | 8月 苦小牧市営バス、モラップ線運行<br>9月14日頃 樽前山噴火<br>9月22日 特別地域・特別保護地区指定<br>この月 丸駒温泉旅館に土石流直撃                                                                 | この年 樽前山神社奥宮再建（混造）／資材運搬のため現・登山道でできる樽前山標高空中写真測量によって修整1042m（ドーム）<br>支笏湖観光船企業組合創設（町指導による遊覧船・貸ボート業者統合）・道補助金を受け室蘭港内貨物船を支笏湖で改造し、系に丸（20t）就航<br>この年の 支笏湖遊覧船／清和丸（定員50）、はやぶさ丸16、第1つばめ丸36、第2つばめ丸24、第1千鳥丸22、第2千鳥丸17、つばさ丸7、丸駒丸38、モラップ丸34／貸ボート237艘 |
| 昭和29年（1954） | 3月30日 千歳支笏湖線、道道支笏湖公園線として路線認定<br>支笏湖産業道路、道道苦小牧支笏湖線として路線認定<br>この月 湖畔地区簡易上水道完成                                                                   | 昭和31年（1956）<br>1月 水明中学校開校<br>10月 紋別岳無線中継所運用開始<br>この年 苦小牧観光協会「湖畔の夕べ」開催（後・モラップキャンプまつり）<br>湖畔地区千歳郵便局管内になる（千歳から郵便輸送開始）                                                                                                                  |

紋別岳山麓南斜面にスキー場開設（S 37・2・21高松宮殿下・支笏湖  
スキー場と命名）

昭和32年（1957）

2月 水明小学校藤の沢分校開校

10月1日 支笏湖集団施設地区区域指定（『増補』S 29・4・18）

この年 奥潭で初の温泉井掘削（B0 船着場、少量自噴）

いとう温泉ホテル開業（S 53改築）

苫小牧市道樽前山登山観光道路開通

昭和33年（1958）

6月9日 道営モーラップキャンプ場千歳町移管

6月23日 皇太子殿下支笏湖ご遊覧

7月1日 千歳市制施行

11月1日 石山〜丸駒間道路開通（S 34年豪雨土砂崩れにより不通）

11月12日 美笛〜大滝間道路開通式

この年 支笏オコタン荘開業

道内各地温泉乱掘問題続発↓道林務部林政課が市の一括泉源保持要請  
↓市議会が市の湯本権利取得と供給を承認↓市が支笏湖周辺温泉開発  
に至る

支笏湖企業船組合設立（旧・支笏湖観光船企業組合）

支笏湖南岸林道（支笏湖畔林道）丸山〜美笛〜奥潭間工事着工（札幌

営林局）

第1回支笏湖回転スキー競技大会開催（第31回まで開催）

恵庭町道の林道恵庭支笏湖線開通（S 36道道光竜鉦山停車場線、S 57

主要道道恵庭岳公園線）

昭和34年（1959）

2月 支笏湖自治消防団設置

9月5、6日 局地的豪雨により美笛川橋梁流出、道路決壊

10月1日 千歳山岳愛好会設立（S 55）千歳山岳会

この年 千歳鉦山元山・フレナイ坑休止、福神沢坑のみ採掘

水明中学校藤の沢分校開校

苫小牧市営樽前山七合目ヒュッテ、駐車場開設

苫小牧市営バス、樽前登山線運行

道道支笏湖公園線舗装工事着手

昭和35年（1960）

6月 支笏湖グランドホテル新館開業（S 36夏説あり）

7月13日 支笏湖ユースホテル新館完成（赤い三角屋根）

8月4日 全国レクリエーション大会支笏湖開催

9月1日 愛林緑化思想昂揚記念部分林契約締結（植樹祭会場／道・営林局）

11月30日 奥潭1151林班オコタン・、イ号で温泉井掘削成功（地下36m最高

45℃、110ℓ）同年B1、B2、B3井掘削⇨ホテルB2利用

支笏湖企業船組合、菱中通船部（みどり丸）全事業を北炭観光に譲渡  
↓北炭観光遊覧船部門独立↓支笏湖観光運輸（株）設立（『市史』S  
36）

この年 苫小牧市、苫小牧山岳会協力で樽前山七合目ヒュッテ開設

王子別邸、商店街南西から現在地へ移転（離れ座敷増築）

支笏湖南岸林道（支笏湖畔林道）完成

昭和36年（1961）

4月1日 千歳市温泉使用条例施行（規則施行S 42・7・1）

石切山〜丸駒間道路、道道308号丸駒札幌線として認定（総延長45

km中15km⇨幅員35m以下⇨自動車通行不可）

|             |                                                                                                                                |
|-------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 4月7日        | 奥潭1148林班オコタン・ロ号で温泉井掘削成功（B4井掘削Ⅱ4・25Ⅴ5・22ホテル利用）                                                                                  |
| この月         | 札幌オリンピック誘致時滑降コースを恵庭岳と内定（設定・国際スキー連盟滑降回転競技委員長ウォルフガング）                                                                            |
| この頃         | 植樹行事のため王子製紙が水明郷くモラップ間受電設備設置（S37千歳市へ寄贈）                                                                                         |
| 5月24日       | 天皇皇后両陛下をお迎えし第12回植樹行事・国土緑化大会開催（植樹祭／御泊所Ⅱ王子別邸、支笏湖畔モラップ山麓）                                                                         |
| 8月11日       | 第3回国立公園大会開催                                                                                                                    |
| 11月25日      | 湖畔地区電話自動化即時通話化                                                                                                                 |
| この年         | 十和田湖からヒメマス卵30万粒移植<br>ポロビナイキャンプ場開設<br>支笏湖グランドホテル別館完成<br>道南バス、洞爺湖温泉く美笛鉱山間運行<br>美笛く奥潭間道路開通（苦小牧営林署木材輸送事業林道Ⅱ支笏湖畔林道）<br>美笛丸（73・8t）進水 |
| 昭和37年（1962） |                                                                                                                                |
| 3月          | モラップ地区を農林省から厚生省に移管                                                                                                             |
| 5月24日       | 植樹行事記念碑（植樹祭記念碑）除幕式                                                                                                             |
| 9月          | 王子製紙、鈴木梅四郎翁頌徳碑建立（水溜）                                                                                                           |
| 12月         | 僻地診療所開設（湖畔）                                                                                                                    |
| この年         | 米軍支笏湖水上訓練場移設（モラップ一の沢河口くシリシュット、宿泊施設17棟）<br>支笏湖北海ホテル開業（岩倉組、S55北海交通）                                                              |
| 昭和38年（1963） |                                                                                                                                |
| 5月          | 水産庁北海道さけ・ますふ化場千歳支場（水産庁）、シロザケとヒメマス交配種稚魚1万5000尾放流                                                                                |
| 6月15日       | 支笏湖診療所落成                                                                                                                       |
| 7月28日       | 水産庁、シロザケとヒメマス交配種稚魚7000尾オコタンペ湖放流                                                                                                |
| 8月1日        | 市道支笏湖周辺道路奥潭側着工（道道札幌支笏湖線く奥潭）                                                                                                    |
| 11月6日       | 国有林野内モラップ山スキー場運営協議会設置                                                                                                          |
| 10月13日      | 王子製紙支笏湖研修会館全焼                                                                                                                  |
| 12月15日      | 千歳市、苦小牧市共同出資の国設モラップ山スキー場開設                                                                                                     |
| 昭和39年（1964） |                                                                                                                                |
| 3月31日       | 水明小学校閉校（※）                                                                                                                     |
| 4月2日        | 千歳消防団（消防団）支笏湖分団創設（9月小型動力ポンプ配備）                                                                                                 |
| 5月15日       | 水明小学校閉校し支笏湖小学校に統合、水明中学校藤の沢分校廃止                                                                                                 |
| 7月2日        | 湖畔く幌美内間有料道路着工                                                                                                                  |
| 7月15日       | 王子製紙支笏湖研修会館再建                                                                                                                  |
| この月         | 水産庁、シロザケとヒメマス交配種稚魚4万尾放流（S40く42にも放流）                                                                                            |
| 12月27日      | 市営支笏湖スケート場完成                                                                                                                   |
| この年         | 千歳鉱山架空索道廃止                                                                                                                     |
| 昭和40年（1965） |                                                                                                                                |
| 2月16日       | 美笛地区降雪40cm、260世帯孤立                                                                                                             |
| 4月          | 洞爺支笏湖線（現・国道276号）主要道道認可                                                                                                         |
| 5月24日       | 樹魂碑建立（口無沼15号台風風倒木処理基地跡）                                                                                                        |
| この月         | 千歳鉱山、湖上輸送をバス・トラック輸送に切替                                                                                                         |
| 6月          | 消防団美笛分団創設                                                                                                                      |

7月23日 支笏湖畔バスターミナル完成（苫小牧市、中央バス共同出資）  
この年 水産庁、シロザケとヒメマス交配種稚魚4万8720尾放流

中央バス、札幌～千歳～支笏湖、千歳～支笏湖間運行  
国設モーターラップ山スキー場にリフト整備

千歳市山岳遭難救助隊設立（札幌地方山岳遭難対策協議会苫小牧支部から独立）

#### 昭和41年（1966）

3月31日 水明中学校閉校

8月 道道支笏湖公園線舗装完了

10月7日 1972年札幌オリンピック冬季大会滑降競技会場に恵庭岳決定

この年 水産庁、シロザケとヒメマス交配種稚魚3万2650尾・サケ稚魚10万尾放流

#### 昭和42年（1967）

1月 （株）翠明閣設立（資本金1000万円）

3月31日 水明小学校藤の沢分校廃止

4月26日 国立公園支笏湖運営協議会設立

5月16日 王子製紙、支笏湖鉄橋（現・山線鉄橋）を千歳市へ寄贈（ホテル翠明閣改装（リニューアルオープン）記念として）・塗色Ⅱ茶

8月31日 第七師団レンジャー訓練で隊員4人がモラップで水死

9月20日 支笏湖畔有料道路開通

道道札幌支笏湖線全線未舗装開通（現・国道453号）

この月 道道苫小牧支笏湖線（幌美内～丸駒／現・道道丸駒線）開通

#### 昭和43年（1968）

7月4日 札幌オリンピック恵庭岳滑降コース建設許可（厚生省）

9月19日 札幌オリンピック恵庭岳滑降競技場起工式

10月10日 奥澤で温泉B5井掘削（12・2、S45・7追掘）

この年 道道苫小牧支笏湖線舗装完成（S44国道276号に昇格）

支笏湖定期観光バス夏季運行（札幌～）

道道支笏湖公園線沿い100mを千歳風致保護林に指定

恵岳会設立

#### 昭和44年（1969）

5月 支笏湖商交会設立（会長・千葉進、15人）…解散時期不詳

6月15日 ホテル支笏湖庭の湯開業

7月1日 中央バス、札幌～幌美内～支笏湖、千歳空港～支笏湖間運行（1日9往復）

支笏湖観光運輸（支笏湖観光バス）、札幌五番館～支笏湖、湖畔～幌美内～支寒内間運行

8月29日 第1発電所クマ出沒、老婆事件発生1人死亡（吉村昭著『熊撃ち』題材）

11月1日 米軍支笏湖水上訓練場、日本政府に返還

12月20日 千歳市青年の家支笏湖青少年研修センター開設

この年 美笛トンネル開通（335m）

#### 昭和45年（1970）

2月6日 道道支笏湖線供用（道道認定3・31）

2月8日 全日本冬季競技総合大会（プレオリンピック）滑降競技が恵庭岳で開催

2月23日 南7条林道改線で第1縦断林道に改称（1万3701m）

3月16～20日 雪害で道道洞爺支笏湖線全線不通、砥石沢で苫小牧宮林署員雪崩で行方不明

3月31日 市道支笏湖周辺道路と支笏湖畔林道、道道支笏湖線として認定

4月1日 道道苫小牧支笏湖線、他3路線とともに苫小牧～倶知安間国道276号昇格

4月7～9日 低気圧による大雨で支笏湖畔有料道路路面決壊(6月～片側交互交通⇨料金徴収せず)

7月21日 千歳観光協会法人化認可、社団法人千歳観光連盟発足

この年 支笏湖畔有料道路第1～第6覆道建設

昭和46年(1971)

2月5～10日 札幌国際冬季スポーツ大会(プレオリンピック) 滑降競技が恵庭岳で開催

5月24日 客船恵庭丸(65・5t)進水(オリンピック観戦者湖上輸送用)

7月1日 環境庁発足(H13・1・6環境庁改組、環境省設置)

この年 札幌～支笏湖畔有料道路終点間舗装完了(道道札幌支笏湖線⇨現・国道453号)

札幌市常盤～支笏湖幌美内間自転車道路全線完成

道道札幌支笏湖線⇨奥潭間舗装完了

支笏湖汚染防止対策で簡易浄化施設設置、集水管渠路線切替(※)

苫小牧市丸山～モラップ間舗装完成

この年の 支笏湖遊覧船/恵庭丸(定員226)、美笛丸222、みどり丸85、

白銀丸50、第1樽前丸32/快速艇12隻/貸ボート705艘

昭和47年(1972)

2月5、7日 札幌オリンピック滑降競技恵庭岳開催(五輪期間3～13日)

12月 千歳観光連盟、千歳空港駐車場営業開始(認可・運輸省)

この年 中央バス、札幌～(道央自動車道経由)～支笏湖間運行

支笏湖レイクサイドホテル開業

昭和48年(1973)

7月2日 支笏湖観光事業共同組合(温泉管理)設立

9月30日 支笏湖プリンスホテル(幌美内)火災、重軽傷者10人

10月7日 支笏湖集団施設地区区域変更

11月 消防団支笏湖分団、消防ポンプ車1台配備

この年 口無沼、風景林に指定

昭和49年(1974)

6月 王子発電所員、苫小牧から通勤

9月 千歳市消防署(消防署) 支笏湖分遣所新庁舎落成

この月 支笏トンネル完成(995m)

10月17日 支笏湖勤労青少年フレンチドリップセンター開設

この月 ヒメマス尾ぐされ病(水カビ病)発生、ヒメマス大量に岸に打ち上げられる(原因不明)

昭和50年(1975)

4月30日 支笏湖畔、第1泉源通湯式(39℃純重曹泉/天然ガス加盟5ホテル使用開始)

5月18日 『うちのホンカン』シリーズ放映開始(倉本總脚本/大滝秀治、八千草薫/「東芝日曜劇場」北海道放送制作S50・56) 全6作中支笏湖舞

台Ⅱ「ホンカンがんばる」うちのホンカンPARTⅡ(10・19)、

「嘆きのホンカン」PARTⅢ(S51・7・11)、「冬のホンカン

PARTⅣ」(S52・3・13)

6月1日 支笏湖自然の村開村(6月～9月/五輪跡施設)

6月1日 ヒメマス、尾ぐされ病で全面禁漁(⇨S53)

この年 支笏湖野鳥の森開設

千歳市、ボロビナイ休憩所開設(支笏湖観光センター)

昭和51年(1976)

6月4～9日 風不死岳クマ出没、風不死事件発生（4、5日2人重傷／9日2人死亡1人重体）

9月27日 支笏湖畔国民休暇村起工式

この年 支笏湖北海ホテル開業（旧施設買収）

地蔵尊を支笏湖老人クラブが清掃と法要のボランティア開始

昭和52年（1977）

4月 第1回支笏湖湖水開き、メイン行事・地元青年4人の「歴史の再現いかだ流し」＝松浦武四郎「夕張日誌」記述の奥潭へ湖畔筏渡り

7月23日 国設美笛野営場開設（苫小牧営林署開設、千歳市管理受託）

8月 有珠山噴火

9月19日 支笏湖畔国民休暇村開業

この月 支笏湖自然の村廃村決定（3年間利用者4962人、S53解体）

10月16日 第1回支笏湖紅葉まつり開催

10月30日 千歳鉱山小中学校閉校

11月15日 千歳鉱山職住分離完了（雇用促進住宅真町宿舍入居）

11月30日 美笛支所廃止

12月21日 道道丸駒線供用

この月 消防団美笛分団廃止（S53・1・11解団式）

昭和53年（1978）

2、3月 支笏湖全面結氷

3月31日 千歳鉱山小中学校閉校

4月25日 支笏湖ヒメマス釣魚対策協議会設立総会

5月14日 樽前山小噴火（22時53分～23時36分苫小牧測候所／A火口火山灰噴出し山腹降灰／17、8・8、12・12、16、26、29にも噴火）

6月1日 ヒメマス解禁日、強風で釣舟6艘転覆1人死亡1人行方不明

6月21日 CBSソニー、ラブリーズ「紅すずらの伝説」発売（作曲平尾昌晃）

8月17日 斉藤實、苔の洞門調査（環境庁主管）

10月15日 美笛郵便局閉鎖

昭和54年（1979）

1月30日 第1回千歳・支笏湖水濤まつり開催（2・11／S53・11製作開始・竹中敏洋指導）

1～5月 樽前山小噴火

4月 支笏湖神社現在地（支笏湖小付近）に遷す↑S32旧ビクターセンター横（海軍航空隊社殿移築）↑山線鉄橋南側（山線湖畔駅）斜面

樽前山登山規制（5月登山禁止）

7月1日 自然公園美化管理財団支笏湖支部設立

7月25日 支笏湖畔駐車場有料化（環境庁所管地のみ）

この年 中央バス、札幌～幌美内～支笏湖～千歳空港間運行

モーターキャンプ場失火

イチャンコツペ山頂に反射板設置（北海道開発局）

丸山遠見望楼新築（木造4階建13m）

松竹「男はつらいよ 翔んでる寅次郎」シリーズ第23作公開（山田洋二原作・監督／渥美清、倍賞千恵子、マドンナ・桃井かおり）ロケ地・支笏湖

昭和55年（1980）

4月1日 千歳山岳会設立

4月18日 紋別岳林間スキー場基礎調査結果公表

5月1日 支笏湖ビクターセンター開設

この年 環境庁支笏湖自然保護官事務所建設

コープさつぼろ、支笏湖レイクサイドホテル買収し営業開始

勇払川上流の滝を「7条大滝」と命名、高さ16m、幅2・3m、流量

1万2493m<sup>3</sup>/日

昭和56年(1981)

2月27日 樽前山小噴火

7月1日 支笏湖ユースホステル新築営業開始

8月 二度の豪雨で有料道路決壊(56台風)

11月 自然探究路整備完了(湖畔くモラップ)

ママチ川ヒメマス養殖施設(泉沢養魚場)完成

この年 滝笛環境資源振興協議会発足(苫小牧営林署苗畑閉鎖↓跡地利用打診

↓検討)

支笏湖ヒメマス保護協力会解散↓支笏湖漁業組合設立

昭和57年(1982)

3月31日 苫小牧市立丸山小学校閉校

4月26日 泉沢養魚場(チップの里)開場

6月1日 ヒメマス釣り3年ぶり解禁

9月14日 国道276号滝笛トンネル(1545m)開通(貫通)式

この年 支笏湖小学校新(現)校舎完成

昭和58年(1983)

7月1日 樽前山登山規制解除

8月10日 支笏湖下水道終末処理場(支笏浄湖苑)通水式

10月 苔の洞門、仮設駐車場供用

この年 支笏湖グランドホテル休業

道設支笏湖紋別岳鳥獣保護区(北東斜面425ha)・特別保護区(頂

上北側49ha)設定(H15・3更新、次期H34・9・30)

昭和59年(1984)

1月 氷濤まつり氷像著作権問題顕在化(著作権者・竹中敏洋)

3月21日 苔の洞門運営協議会設立

4月14日 支笏湖畔有料道路無料化

5月27日 道道支笏湖公園自転車道線全線開通

10月5日 美笛峠新ルート開通

11月 休暇村園地展望台完成

この年 第3セクター滝笛環境資源振興協議会設立

昭和60年(1985)

4月18日 滝笛環境資源振興協議会解散

11月1日 苫小牧営林署支笏合同担当事務所新築披露

この年 「美笛国際森林レクリエーション事業構想」策定(市)

この頃 美笛食堂開店(旧・千歳鉱山配給所)

昭和61年(1986)

2月24日 千歳鉱山休山式

3月29日 支笏湖市民センター(湖畔支所↓支笏湖支所)竣工

4月20日 字名改正「湖畔」↓「支笏湖温泉」

6月1日 中央バス・道南バス、新千歳空港↗美笛↗洞爺湖温泉直行バス運行

10月 恵庭岳オリンピック顕彰碑維持管理問題顕在化(S62・10スポーツセ

ンター移設)

この頃 樽前山に非固有種コマクサ違法移植

昭和62年(1987)

9月13日 第11回全国育樹祭お手入れ行事開催(支笏湖畔モラップ山麓/皇太子

同妃両殿下ご出席)

この年 環境庁、公用水域水質測定結果初公表…支笏湖Ⅱ湖沼水質日本一

(S63、H4、5、7、11、12、14、17、19、25も水質日本一)

「美笛国際森林レクリエーション事業構想」名称変更↓「支笏湖国際コンベンション・リゾート構想」として大規模開発を図る国際会議場構想  
山陽国策パルプ(現・日本製紙)健康保険組合支笏湖畔荘開設(岩倉建設トムロジ支笏湖買収)

苔の洞門、コケ養生・駐車場整備のため開放なし

昭和63年(1988)

1月 支笏湖の水とチップの会発足

10月10日 支笏湖紅葉まつり中止。昭和天皇が9月19日病状悪化し全国的にイベント自粛(代替・支笏湖観光運輸5000円大人袋発売)

この年 旧・支笏湖畔有料道路第7覆道建設

昭和64年(平成元年/1989)

6月23日 北海道さけますふ化場新庁舎落成

10月3日 国道276号モラップ付近切替

この年 美笛食堂廃業

国設モラップ山スキー場山頂リフト運休

苔の洞門に臨時公衆電話設置

平成2年(1990)

3月16日 スウェーデン国王、丸駒温泉旅館へ宿泊

4月10日 支笏湖商工会立ち上げ(2回目)

4月11日 支笏湖観光船レストハウス増築新装開店

8月1日 支笏湖小学校、支笏湖周辺美化活動で環境庁長官賞受賞(H元)全国森林レクリエーション協会会長表彰、S63北海道知事賞

9月 旅亭あしり支笏湖開業

12月1日 樽前山車馬等乗入規制地区指定

この年 「支笏湖国際コンベンション・リゾート構想」名称変更↓「支笏湖美笛地区自然環境整備利用計画」↓反対意見があり中止

平成3年(1991)

2月 気象庁、恵庭岳を活火山指定

3月29日 支笏湖診療所新庁舎落成

4月 自然研究路、休暇村モラップ間整備完了(※)

8月1日 消防署支笏湖温泉分遣所、出張所昇格

平成4年(1992)

8月5日 第34回自然公園大会開催、常陸宮同妃両殿下ご出席(丸駒温泉御泊)

9月 支笏湖グランドホテル廃業、解体始まる(H5植栽返地)

平成5年(1993)

4月1日 道道札幌支笏湖線、国道453号として昇格

11月1日 支笏湖ヒメマス移植1000年・養殖ヒメマス出荷10周年記念祝賀会

12月1日 苫小牧市営バス支笏湖線、中央バスに移譲(H13休止、H14廃止)

この年 「支笏湖美笛地区自然環境整備利用計画」の一部として「千歳市野営場整備計画」策定

平成6年(1994)

1月 現・第5駐車場トイレ改築

この月 幌美内に現・トイレ設置(4月開放/旧・トイレS55設置)

温泉街歩道カラーブロック化完成

休暇村、モラップキャンプ場管理千歳市から受託(※)

9月10日 千歳さけのふるさと館開館(千歳青少年教育財団)

12月5日 水産庁、さけの里ふれあい広場開設記念式

この年 温泉街商店街周囲に排水溝設置

国設モラップ山スキー場休止

平成7年(1995)

2月 支笏湖温泉園地西側展望台完成

3月 支笏湖温泉中層市営住宅完成(入居受付3・15)

4月 モラップ自由キャンプ場進入規制実施

8月21日 支笏洞爺国立公園、公園区域・公園計画見直し再検討↓支笏湖集団施設地区区域変更(S28※指定以来初)

9月5日 山線4号機関車帰郷式(静態保存/苫小牧王子アカシア公園)

9月8~10日 支笏湖とチップの会+高知大学↓湖最深部調査(H8も実施)

10月14日 ヒメマスフォーラム開催

12月 温泉街に身障者用電話ボックス設置(市内2カ所目)

この年 美笛キャンプ場、苫小牧営林署から千歳市に譲渡

東宝『キャンプで逢いましょう』公開・後藤久美子主演/ロケ地・支笏湖美笛キャンプ場(主題曲/松任谷由美 Midnight Scarecrow)

平成8年(1996)

1月 水像制作過程パネル写真展示(氷濤まつり会場初)

4月1日 北海道営林局漁岳周辺地域森林生態系保護地域設定

「支笏湖畔国民休暇村」名称変更↓「休暇村支笏湖」

4月14日 温泉街初、身障者用ブース付の中央トイレ開放(通称・丸駒トイレ)

6月8日 苔の洞門、安全対策工事で開放遅延(入口左岸壁崩落危険箇所↓危険箇所ダイナマイト、ドリル除去)

9月21日 恵庭岳ポロピナイ沢大規模土石流発生(S46以来)

10月14日 温泉街初、押しボタン式信号機設置(国道453号横断歩道)

11月1日 千歳市の魚制定(ヒメマス、サケ)

平成9年(1997)

8月10日 恵庭岳ポロピナイ沢土石流発生(9・27にも発生)

10月7日 ラルマナイ林道改良完成し恵庭岳公園線ルート切替

10月 道道支笏湖線、国道276号↓美笛キャンプ場分岐間舗装

11月22日 山線鉄橋開通式(H7↓解体修理)

この月 道道支笏湖線、美笛↓奥潭間土砂崩れのため通行止め

美笛沖、マグロの頭騒動(釣りのため(※)↓回収廃棄)

12月3日 支笏湖支所開設50周年を祝う会開催

この年 モラップキャンプ場、千歳市から環境庁移管↓休暇村支笏湖運営

平成10年(1998)

2月 高知県南国市立奈路小学校児童、支笏湖小学校初訪問「雪国体験」(6月、支笏湖小児童が奈路小訪問/H8↓交流)

4月 休暇村温排水公共下水道と接続、温泉地区配水完全処理達成

5月 道道支笏湖線、美笛↓奥潭間土砂崩れのため通行止め

8月11日 千歳市ヒメマスふ化場開設(水産庁譲渡)

この年 国道453号幌美内↓札幌間24時間通行可

美笛キャンプ場リニューアル完了(3カ年度計画)

平成11年(1999)

1月 支笏湖レイクサイドホテル休業(H13・11解体)

7月10日 支笏洞爺国立公園指定50周年記念フォーラム開催

7月30日 千歳川放水路計画中止決定

10月 ポロピナイ沢治山工事完了(ダム20基、空堀水路)

平成12年(2000)

2月9日 樽前山火山防災会議協議会(樽防協)設立(事務局苫小牧市)

3月31日 有珠山噴火

4月26日 支笏湖美化センター開館

この月 休暇村園地展望台建替開放

ホテル翠明閣休業

9月28日 支笏湖畔バスセンター営業終了

この月 「緑のダイヤモンド計画（自然公園核心地域総合整備事業）」基本計画策定公表

この年 日本製紙健康保険組合支笏湖畔荘閉鎖

平成13年（2001）

2月1日 発達した低気圧によって国道453号（旧・有料道路区間）で雪崩

16カ所発生

この月 支笏湖全面結氷（23年ぶり、2・15～4・10）

3月16日 支笏湖小学校卒業式、児童自主制作＋崔洋一監督編集指導「支笏湖の宝物」上映

この月 「緑のダイヤモンド計画」基本計画公表

樽前山火山防災マップ作成（樽防協）

4月2日 消防署支笏湖温泉出張所新築落成

この月 支笏湖温泉農林省所管地、環境庁へ所管替

6月5日 苔の洞門崩落全面閉鎖

7月1～3日 支笏湖小学校児童TV「モグモグゴンボ」集録で沖縄県宮古島市

立池間小学校（池間島）訪問（H13・2・24、25池間小児童が支笏湖

小訪問）

8月10日 恵庭岳山頂部登山規制（H25自粛要請）

10月11日 「緑のダイヤモンド計画」温泉地区整備・駐車場改良着手

10月15、16日 支笏湖ブラックバス初調査（道立水産ふ化場）

12月 小野寺昌道、支笏湖新確認ヌマチチブ、オヒルムシロを環境省報告

この年 モラップ山スキー場閉鎖確定

丸山遠見望楼新築（四代目／木造4階建・高さ13m）

樽前山火山噴火災害総合監視体制整備事業、紋別岳中継局開設

平成14年（2002）

1月5日 支笏湖まちづくりプロジェクト結成

2月20日 旅亭あしり支笏湖休業（6月定山溪第一ホテルへ譲渡）

この月 支笏湖漁業組合設立20周年記念講演会・祝賀会開催

5月15日 樽防協「樽前山火山防災計画」策定

この月 樽前山噴出物確認

6月1日 支笏湖ビジターセンター改築のため休館

7月1日 「自然公園美化管理財団」名称変更↓「自然公園財団」

7月20日 苔の洞門、入口に観覧台設置↓暫定開放

8月6日 米軍キャンプ場跡地、閉鎖ゲート設置

9月1日 支笏湖第一寶亭留翠山亭開業

11月30日 奥潭無許可棧橋、札幌土現千歳出張所撤去

この年 支笏湖地域花調査グループ（代表佐々木幸夫）が支笏湖温泉園地・野

鳥の森・紋別岳調査↓2003年ガイドマップ『支笏湖の草花、木の

花』作成

平成15年（2003）

1月 苫小牧市道モラップ1号線、氷濤まつり期間中開通

2月 国道453号（旧・有料道路区間）ポロピナイ覆道完成

3月 支笏湖勤労青少年フレンドシップセンター閉所

4月26日 奥潭で山菜採りの男性（70）転落死

この月 「緑のダイヤモンド計画」親水広場完成（山線鉄橋南側）

5月 千歳の自然保護協会、美笛巨木の森調査：幹周1m以上54本、最大

233cmハルニレ

7月5日 支笏湖ビジターセンター、リニューアルオープン

この月 樽前山噴出物確認

9月2日 支笏湖自治振興会、自主防災会結成

9月14日 台風14号、倒木が美笛キャンプ場テント直撃、死者1、負傷2

この月 苔の洞門ネイチャーセンター完成（H16・6供用）

11月 紋別岳くイチャンコッペ山トレッキングルート調査（市）

加森観光、三井観光開発から支笏湖観光運輸株全株取得

この年 樽前山火山噴火災害総合監視体制整備事業、モラップ中継局開設、  
札幌土現千歳出張所監視支局設置

平成16年（2004）

1月 支笏湖まつり実行委員会、氷濤まつり会場で感動支援金呼掛け

2月 消防署支笏湖温泉出張所、救急車配備

3月1日 丸駒温泉旅館、大浴場改修のため休館（4・21営業再開）

8月1日 NPO法人支笏湖まちづくり機構、Zooステージ活動開始

9月8日 台風18号、支笏湖周辺森林大被害（支笏湖温泉孤立、停電）

平成17年（2005）

1月 国道453号（旧・有料道路区間）モンベツ覆道完成

3月15日 支笏湖青少年研修センター閉所式

3月20日 恵庭岳北尾根、雪崩発生1人重傷

4月10日 支笏湖観光運輸水中遊覧船運輸開始（エメラルド18t、サファイア17t）

6月25日 道の駅サーモンパーク千歳、営業開始

8月 特定外来生物ウチダザリガニ確認（小野寺昌道）

11月下旬～12月29日 支笏湖地区、エゾシカ有害駆除始まる

平成18年（2006）

2月19日 千歳山岳会、氷濤まつり会場でアイスクライミング披露

この月 公園計画変更・支笏湖動力船規制要項発表（環境省2・20告示／千歳市、動力船規制承認線受付3・15～4・20）

4月16日 ポロピナイ休憩所（支笏湖観光センター）、火災により閉鎖

5月 自然公園財団支笏湖支部アライグマ捕獲調査始まる（H25春）

平成19年（2007）

3月 泉沢養魚場休止（H23）日本海さけ・ます増殖事業協会飼育施設

4月 支笏湖温泉地区活性化協議会（会長福永郷正）発足

5月20日 モーラップ全国植樹祭の森四十七年目の記念植樹

7～10月 支笏湖地区、特定外来生物オオハンゴンソウ駆除始まる

10月23日 支笏湖漁業協同組合設立総会

11月 王子発電所・山線4号機関車、経済産業省「近代化産業遺産」認定

この年 国土地理院地図修正、美笛川↓モシルン美笛川、モシルウン美笛川↓  
ソウオン美笛川、美笛川本流（ダムく湖）↓改称・千歳川

平成20年（2008）

3月1日 支笏湖漁業組合、漁業権免許（北海道知事）

3月31日 支笏湖商工会解散（2回目）

4月1日 環境省支笏湖地区初の女性保護官柳谷牧子着任

4月27日 ポロピナイ休憩所（支笏湖観光センター）建替開業

この月 鶴雅観光開発、支笏湖観光ホテル買収

5月 新北光石油支笏湖ステーション閉鎖（S43市内業者開設、S53新北光引継）

この月 環境省、モラップ地区園地整備完了

6月29日 支笏湖いかだ渡りプロジェクト（S52以来）

7月1～9日 ジュニアエイトサミット2008千歳支笏湖開催

7月8日 洞爺湖サミット開催

8月1日 レイクサイドヴィラ翠明閣開業（3月王子経営権↓丸駒温泉旅館）  
秋 支笏湖漁業協同組合、産卵後ヒメマスⅡはつちやれ↓「秋ひめ」命名  
ポロピナイキャンプ場、年度内閉鎖決定

11月1日 支笏湖北海ホテル冬季休業

平成21年（2009）

1月28日 支笏湖小学校、石狩森林管理局と遊々の森協定締結

5月15日 千歳ニツウサービス支笏湖給油所開店

しこつ湖鶴雅リゾートスパ水の調<sup>あ</sup>開業

6月20日 支笏湖いかだ渡り大会

7～9月 苔の洞門モニターツアー（～H24）

8月1、2日 支笏洞爺国立公園60周年記念行事開催

9月11日 支笏湖自然保護官事務所改築開所式

11月26日 北海道地方環境事務所、天皇陛下御在位20年記念植樹（ビクターセン  
ター前、園地などにキタコブシ3本）

平成22年（2010）

4月11日 湖水開きに合わせ、温玉ライス提供に関する調印式・発売開始

5月22日 日中韓3カ国環境大臣会合開催（リゾートスパ水の調<sup>あ</sup>）

11月 支笏湖北海ホテル全面休業

この年 快速艇、丸駒温泉・いとう温泉・オコタンへの乗合運航休止

平成23年（2011）

1月 真冬日連続23日記録（12・31～1・22）

3月11日 東日本大震災（震度Ⅱ支笏湖温泉2、千歳4）

4月1日 千歳観光連盟、一般社団法人化

6月7日 風不死岳活火山認定（火山噴火予知連絡会）

平成24年（2012）

4月20日 千歳観光連盟周遊自転車、ビクターセンターにて貸出開始

7月10日 支笏湖駐在所新築開所式

11月1日 支笏湖温泉旅館組合、札幌～支笏湖間無料シャトルバス・名湯ライ  
ナー運行開始

12月6日 30年ぶりの増水と低気圧による強風で貫田栈橋損壊などの被害

平成25年（2013）

1月 リゾートスパ水の調、支笏湖北海ホテル買収

真冬日連続24日記録（1・1～24）

3月5日 支笏湖温泉新泉源湧出（第2泉源／ナトリウム―炭酸水素塩・塩化物  
泉）、33・2℃・510ℓ／分（動力揚湯）

4月 いとう温泉（含・プリンスホテル跡地）を鬼怒川金谷ホテル買収

11月2日 恵庭岳ポロピナイ沢、札幌在住女性滑落死

この月 イチャンコッペン山頂反射板撤去（南北2基、北海道開発局）

平成26年（2014）

2月25、27日 越冬エゾシカ学術捕獲実施、銃器を使用し国道435号（旧・有  
料道路）閉鎖、酪農学園大学ほか、12頭捕獲

4月13日 支笏湖温泉第2泉源開湯式（第1泉源廃泉／湖水開き）

6月26日 支笏湖ヒメマスふ化場（S3建）・養魚池解体

9月11日 豪雨（日降水量276.5mm）、苔の洞門第1第2人口崩落、ポロピ  
ナイ沢土石流で国道453号通行止被害等、温泉地区に避難勧告

12月19日 支笏湖ヒメマスふ化場新築落成（12・25開湯式）

（編／先田次雄・守屋憲治）